

# 平成23～25年度 大淀町文化財調査報告

保久良古墳・畝火山口神社の水取り神事

大岩大日堂・世尊寺の文化財・槇ヶ峯古墳

2015.3

奈良県大淀町教育委員会 編



# 序

奈良県内でも有数の大河である吉野川に生まれ、豊かな文化を営んできた我が町は、縄文時代以来、人々の行き交う吉野文化の門戸として栄えてきました。

これらの歴史文化遺産を継承し、その保存・活用を推進するために、大淀町教育委員会では各種文化財の調査事業を推し進めております。このたび刊行の運びとなりました本書も、その成果の一つであります。

本書には、天智天皇の皇子・建王のもがり塚と伝える保久良古墳、石柵をもつ岩橋型石室のひとつである榎ヶ峯古墳、現存する町内最古の建造物である大岩大日堂、禅院・世尊寺所蔵の文化財、そして昨年、本町ではじめての指定無形民俗文化財となった、畝火山口神社の水取り神事についての調査成果を掲載いたしました。

これらは、本町を含む吉野地域をかたち作ってきた悠久の歴史を物語るうえで、いずれも欠かせない重要な成果といってよいものです。その調査成果を公刊できることは、本町にとってもひとしおの慶びであります。教育現場や研究機関をはじめとする多くの方々に、本書をご活用いただきますよう、お願い申し上げます。

最後になりましたが、調査にあたり様々なご配慮を賜りました地元地区の皆様と、ご指導を賜りました奈良県教育委員会ならびに奈良県立橿原考古学研究所の先生方、ご協力を賜りました大淀町文化連盟文化財調査会の皆様に、心よりお礼申し上げます。

平成27年3月

大淀町教育委員会 教育長 水掬 義朗

# 例 言

## 1 この本は、つぎの文化財調査の報告書です。

- ① 大淀町指定史跡・保久良古墳の保存・活用事業にともなう発掘調査
- ② 大淀町指定無形民俗文化財・畝火山口神社の水取り神事の調査
- ③ 大岩大日堂の屋根改修工事に伴う立会調査
- ④ 世尊寺所蔵文化財（雲門頂相・阿弥陀如来坐像等）の調査
- ⑤ 大淀町指定史跡・榎ヶ峯古墳の保存・活用事業にともなう発掘調査

## 2 調査した文化財の所在地（奈良県吉野郡大淀町以下を記載）

- ① 保久良古墳 大字今木151番地1
- ② 畝火山口神社の水取り神事 大字土田地内
- ③ 世尊寺 大字比曾762
- ④ 大岩大日堂 大字大岩地内
- ⑤ 榎ヶ峯古墳 大字新野528

## 3 調査日程

- ① 保久良古墳 平成23（2011）年6月～平成24（2012）年6月
- ② 畝火山口神社の水取り神事 平成24（2012）年7月
- ③ 世尊寺・雲門頂相 平成24（2012）年9月～12月
- ④ 大岩大日堂 平成24（2012）年12月～平成25（2013）年1月
- ⑤ 世尊寺・阿弥陀如来坐像 平成25（2013）年6月～8月
- ⑥ 榎ヶ峯古墳 平成25（2013）年9月～10月

## 4 調査体制

- 調査主体 奈良県大淀町教育委員会  
調査担当 奈良県大淀町教育委員会事務局生涯学習課 松田 度  
平成22（2010）年4月1日より同課・主任技師  
調査指導 奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所・大淀町文化財保護審議会  
調査協力 大淀町文化連盟文化財調査会

## 5 この本で用いた高度は絶対標高（T.P.）を、方位は磁北を示します。

## 6 上記調査にともなう資料整理は、上記機関の指導と地元地区、各文化財所蔵者（保持者）、大淀町文化連盟文化財調査会の協力を得て、大淀町教育委員会（担当・松田）がおこないました。

## 7 この本の編集は、上記機関の指導・協力を得て、大淀町教育委員会（担当・松田）がおこないました。

## 8 この本で報告した保久良古墳・榎ヶ峯古墳の出土遺物は、奈良県教育委員会との協議のもと、大淀町教育委員会が保管しています。また、それ以外の文化財については、各所蔵者および保持者が管理しています。多くの方々の閲覧と活用を願っています。

## 9 上記以外でも調査と資料整理、本書の作成に際し、多くの方々よりご指導・ご協力を得ました。記して感謝申し上げます。

# 目 次

## I 概 要

- 1 平成23～25年度の文化財事業 . . . . . 1
  - i 事業概要

## II 調査報告

- 1 保久良古墳 (平成23・24年度の調査) . . . . . 5
  - i 調査にいたる経緯
  - ii 調査の成果
    - ア 測量調査
    - イ 発掘調査
  - iii まとめ写真図版
  
- 2 敵火山口神社の水取り神事 (平成24年度の調査) . . . . . 14
  - i 調査にいたる経緯
  - ii 調査の成果
    - ア 神事の概要
    - イ 史料と伝承
    - ウ 記録調査
  - iii まとめ写真図版
  
- 3 大岩大日堂 (平成24年度の調査) . . . . . 21
  - i 調査にいたる経緯
  - ii 調査の成果
    - ア 建物の概要
    - イ 小屋組の修理
  - iii まとめ写真図版

4	世尊寺の文化財 (平成24・25年度の調査) . . . . .	28
	i 調査にいたる経緯	
	ii 調査の成果	
	ア 世尊寺開山・雲門頂相	
	イ 世尊寺本尊・阿弥陀如来坐像	
	iii まとめ	
	写真図版	

5	槇ヶ峯古墳 (平成25年度の調査) . . . . .	34
	i 調査にいたる経緯	
	ii 調査の成果	
	ア 調査の方法	
	イ 遺構と遺物	
	iii まとめ	
	写真図版	

抄録・奥付

## 図版目次

挿 図	〈図 01〉	矢走城跡採集の土師器皿実測図
	〈図 02〉	持尾・迎居家所蔵の漆器角切盆実測図
	〈図 03〉	大淀町内の指定文化財位置図
	〈図 04〉	関連地図 (大淀町西部地区)
	〈図 05〉	関連地図 (大淀町中・東部地区)
	〈図 06〉	保久良古墳の墳丘・石室実測図
	〈図 07〉	保久良古墳出土の琥珀玉実測図
	〈図 08〉	建王イメージイラスト (松田度作成)
	〈図 09〉	水取り神事関連史料 (天理図書館所蔵大谷家文書より一部抜粋・翻刻)
	〈図 10〉	水取り神事関連地図
	〈図 11〉	大岩大日堂の平面略図 (林清三郎氏作成)
	〈図 12〉	槇ヶ峯古墳の墳丘平面・断面実測図
	〈図 13〉	槇ヶ峯古墳の石室 (玄室) 実測図 (右・石棚より見通し 左・床面と試掘坑)
	〈図 14〉	槇ヶ峯古墳出土の遺物 (須恵器) 実測図
カット写真	〈CUT 01〉	石神古墳の見学路整備後 (平成 24 年撮影)
	〈CUT 02〉	平成 24 年度奈良県文化財保護功労者表彰 (東山忠男氏)
	〈CUT 03〉	北六田・北村化学倉庫の内部 (平成 24 年撮影)
	〈CUT 04〉	水取り神事の水取り場 (平成 20 年撮影)

- 〈CUT 05〉 大岩大日堂近景（修復前・平成 18 年撮影）
- 〈CUT 06〉 大岩大日堂の鰐口（平成 24 年撮影）
- 〈CUT 07〉 墨書のある板材（平成 24 年撮影）
- 〈CUT 08〉 大岩神社の手水鉢（塔心礎か）
- 〈CUT 09〉 槇ヶ峯古墳近景（南西から・平成 18 年撮影）

写真図版

- 〈PLATE 01〉 **保久良古墳 調査写真 1（墳丘）**  
01 遠景（西から）・02 近景（南から）・03 墳丘調査区遠景（西から）  
04 墳丘調査区近景（調査前・西から）・05 墳丘の列石検出状況  
06 同列石近景（西から）・07 同列石近景（南から）・08 石室開口部
- 〈PLATE 02〉 **保久良古墳 調査写真 2（石室・出土遺物）**  
09 石室内（埋土除去後・開口部から奥壁をみる）  
10 石室内（玄室から開口部をみる）  
11 石室内深堀 1・12 同深堀 2・13 同深堀 3・14 同深堀 4  
15 出土遺物 1（琥珀玉）・16 出土遺物 2（須恵器こね鉢・瓦器）
- 〈PLATE 03〉 **畝火山口神社の水取り神事 調査写真 1（住吉神社から水取り場へ）**  
01 土田妙見宮境内の住吉神社・02 同住吉神社での礼拝  
03 同神社での祝詞奏上 1・04 同 2・05 同 3・06 同神社から水取り場へ移動  
07 住吉稲荷（住吉神社の旧祠）・08 ケヤキの巨樹（大淀町指定天然記念物）
- 〈PLATE 04〉 **畝火山口神社の水取り神事 調査写真 2（水取り・畝火山口神社での奉納）**  
09 水取り場へ向かう参列者・10 水取り場での祝詞奏上（平成 18 年）  
11 水取りのようす（平成 18 年）・12 水取り場での祝詞奏上（平成 18 年）  
13 水取りのようす（平成 24 年）・14 神事についての地区懇談会（平成 24 年）  
15 畝火山口神社の夏季大祭（奉納演奏）・16 同夏季大祭で本殿に奉納された水
- 〈PLATE 05〉 **大岩大日堂 調査写真 1（屋根小屋組）**  
01 大日堂近景（修理中・北西から）・02 同屋根背面（修理中・北から）  
03 同屋根背面の軒桁と張出部（東から）・04 同屋根南東隅の板張 1（北から）  
05 同屋根南東隅の板張 2（裏面・北から）・06 同屋根からみつかった朱彩色板  
07 同屋根南東隅の大斗と肘木・08 同屋根背面中央の大斗と肘木
- 〈PLATE 06〉 **大岩大日堂 調査写真 2（屋根小屋組 2）**  
09 大日堂正面の小屋組上部 1（近景）・10 同 2（溝のある転用部材）  
11 同小屋組内部・12 同妻側（大棟下の土壁）・13 同北東隅尾垂木の隅瓦  
14 墨書のある垂木材・15 大日堂修理後全景（正面）・16 同全景（北から）
- 〈PLATE 07〉 **世尊寺の文化財 調査写真 1（雲門頂相）**  
01 頂相 A 外題・02 頂相 B 外題・03 頂相 A 絵像・04 頂相 B 絵像・05 頂相 A 賛  
06 頂相 B 賛・07 頂相 C 絵像・08 頂相 C 賛
- 〈PLATE 08〉 **世尊寺の文化財 調査写真 2（阿弥陀如来坐像）**  
01 阿弥陀如来像を壇上よりおろす・02 同像全形・03 同像下面  
04 同像胎内の観察・05 同像胎内背面の墨書  
06 同像の表面観察（関西大学・長谷洋一氏）
- 〈PLATE 09〉 **槇ヶ峯古墳 調査写真 1（墳丘・石室）**  
01 調査前（南から）・02 調査前（東から）・03 墳丘断面（南から）  
04 墳丘断面詳細（南東から）・05 石室開口部（南西から）・06 石室内（玄室）  
07 石材（石棺）の出土状況・08 同出土状況（拡大）
- 〈PLATE 10〉 **槇ヶ峯古墳 調査写真 2（遺物と出土状況・その他）**  
09 須恵器（4）の露出状況 1・10 同 2・11 埋土のふるい作業  
12 出土遺物（須恵器）・13 現地説明会・14 墳丘保護作業のようす 1（東から）  
15 同 2（東から）・16 同 3（南から）

表

- 〈表 01〉 大淀町内の指定文化財一覧（平成 27 年 3 月）
- 〈表 02〉 保久良古墳の基本層序
- 〈表 03〉 雲門頂相（3 幅）の計測値（cm）
- 〈表 04〉 阿弥陀如来坐像の寸法（cm）
- 〈表 05〉 槇ヶ峯古墳の基本層序

# I 概要

## 1 平成23～25年度の文化財事業

### i 事業概要

平成23年度から25年度にかけ、本町教育委員会が実施した文化財事業の概要を記します。

#### 【平成23年度】

4月、町指定史跡の大岩・石神古墳の見学路整備に着手（町文化財調査会との協働で実施）。

5月、紀の川河川改修工事にともない、佐名伝にある伝承地「おいの池」の記録作成（現在は消滅）。6月・9月には、今木・保久良古墳の整備・清掃を実施（後述）。あわせて、公益財団法人由良大和古代文化研究協会の助成を受け、近隣の研究者有志の協力で測量調査を実施しました（平成24年1月）。

9月には、3月11日に発生した東日本大震災のため延期となっていた大淀町伝統文化シンポジウム「大淀町の民俗—継承と活性化—」を開催しました。11月には、新たに所在が確認された国立国文学研究資料館所蔵「吉野郡中増村文書」の記録撮影をおこないました。

12月、大岩・石神古墳の見学路整備が完了。当年度末（平成24年3月）には、石神古墳（附大岩2号墳）が奈良県指定史跡となりました。



CUT 01 石神古墳の見学路整備後（平成24年撮影）

#### 【平成24年度】

6月、比曾・世尊寺所蔵の資料について写真記録調査を実施しました（後述）。続いて、今木・保久良古墳の発掘調査を、町文化財調査会との協働事業として実施（後述）。7月には同古墳が町指定史跡となりました。

同月、町指定文化財指定にむけて、畝火山口神社の水取り神事の聞き取り調査を実施（後述）。

11月には、当年度の奈良県文化財保護功労者として東山忠男氏（本町今木）が表彰をうけました（長年にわたり保久良古墳のガイドボランティアを勤め、保久良古墳を含む所有地を町へ寄付されました）。

また同月、先年度に引き続き、国立国文学研究資料館所蔵「吉野郡中増村文書」の



CUT 02 平成24年度奈良県文化財保護功労者表彰（東山忠男氏）

の写真記録撮影。12月から翌年1月にかけて、大岩大日堂の修理にともなう写真記録調査を実施（後述）。これと並行して、大岩・石神古墳の整備（解説板・石室門扉の新調）を奈良県教育委員会・町文化財調査会との協働で実施しました。なお、石室門扉の新調については、公益財団法人大和文化財保存会の助成を受け、町文化財調査会の事業として実施しました。

また、奈良県近代化遺産緊急総合調査（第1次）の初期調査（所在確認）を、年度内事業として随時実施しました。

【平成25年度】

5月には郷土史家・山本昭緒氏（故人）が著書『吉野一隅』を刊行。中増地区の遺跡・文化財の研究成果が公表されました。6・8月には比叢・世尊寺本尊の調査（後述）。8月には奈良県近代化遺産総合調査（第2次・詳細調査）で北六田に所在する大正～昭和初期の木造倉庫群の現況を確認しました。



CUT 03 北六田・北村化学倉庫の内部（平成24年撮影）

9月、銚立・清九郎の里をめぐる町観光ハイキングの実施にともない、墓所（高取町丹生谷地区）への参詣道が整備されました。同月下旬から10月初旬、新野・榎ヶ峯古墳の発掘調査を町文化財調査会との協働で実施（後述）。10月、従来16世紀代の山城とされていた矢走城跡の踏査。複数個所で13世紀前半の土器（土師器皿）を採集。同月、持尾・迎居家所蔵の近世漆器の所在調査。確認された「よしの左次郎」の墨書をもつ角切盆（図02）は、享保16年（1731）の銘をもつ下市町・西迎院旧蔵の角切盆と同様の製作技法がみられ、「吉野春慶」の町内最古例と判明。翌年1月に開催された「下市漆器展」（町文化連盟主催）にて公開。また、当年度の土木学会選奨土木遺産に、近畿日本鉄道の高架橋・薬水拱橋（こうきょう）が認定されました。

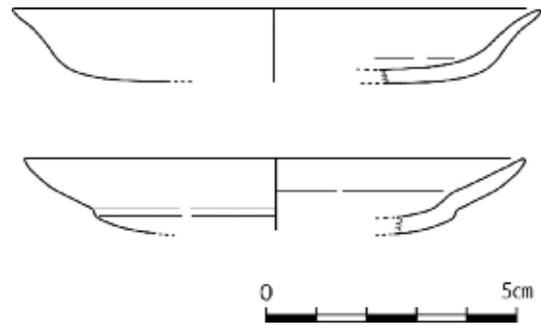


図 01 矢走城跡採集の土師器皿実測図

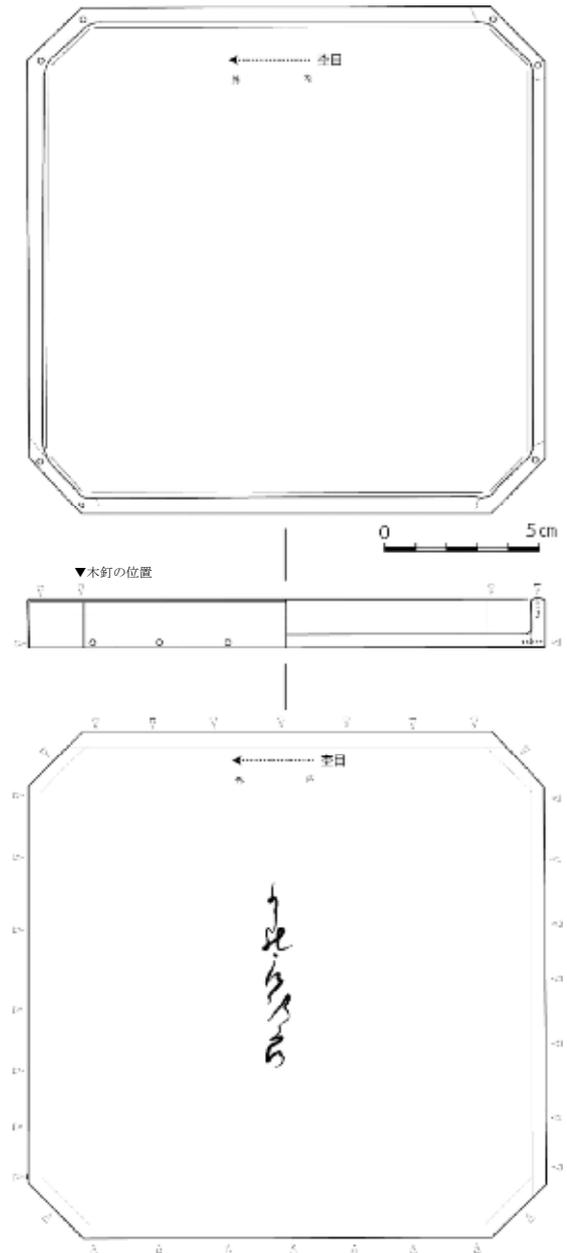


図 02 持尾・迎居家所蔵の漆器角切盆実測図





图 04 関連地図 (大淀町西部地区)

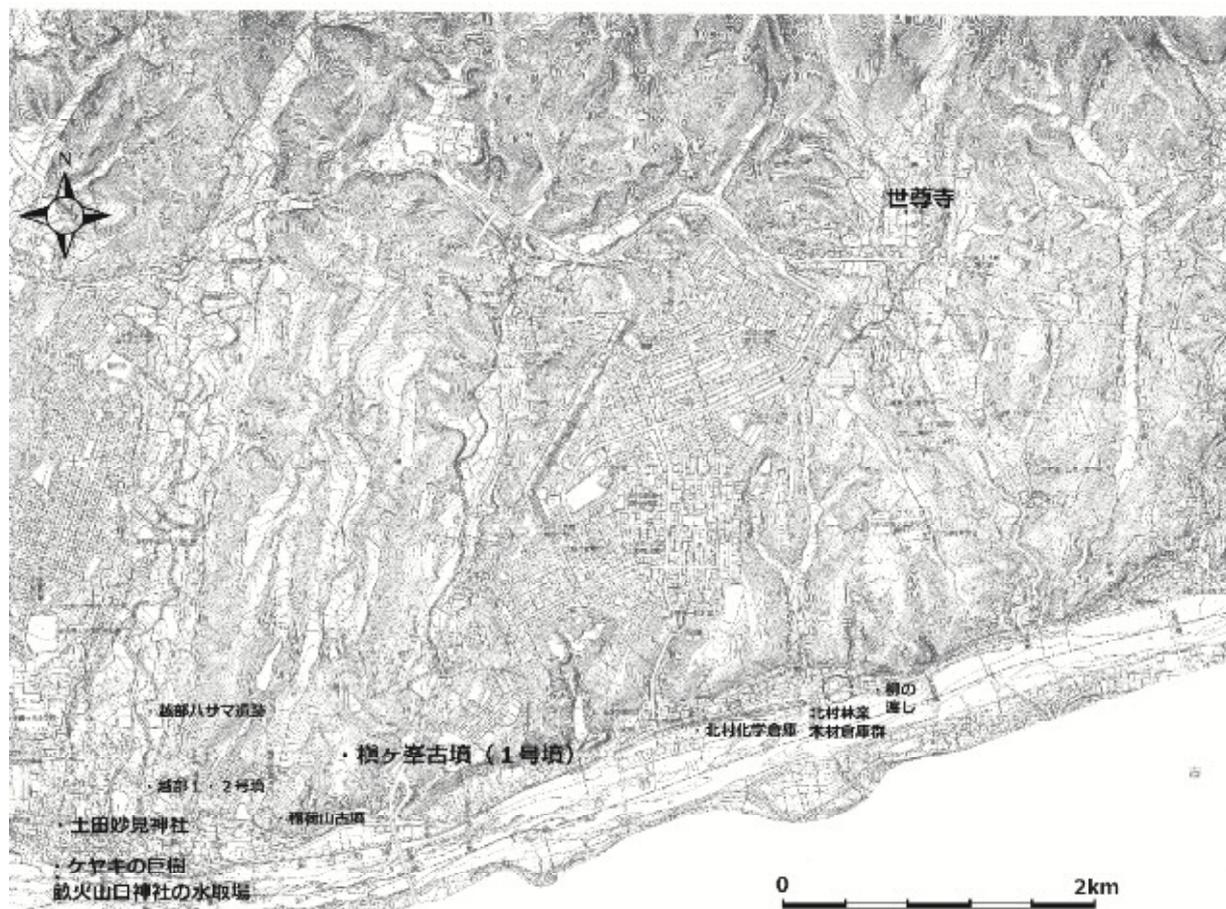


图 05 関連地図 (大淀町中・東部地区)

## II 調査報告

### 1 保久良古墳（平成23・24年度の調査）

#### i 調査にいたる経緯

保久良古墳は大淀町の北西部、今木地区の丘陵裾部にある横穴式石室墳です。この古墳は、平成24年7月26日に大淀町指定史跡となり、古墳全域が町有地として保存されています。石室入口前に解説板が設置され、石室内の見学も可能です。古墳の元所有者・東山忠男氏が、草刈等の管理、現地ガイド、古墳南側の私宅を開放しての関連ビデオ閲覧といった、訪問者への対応を続けてこられました。

地元では、この古墳が『日本書紀』に記す建王（タケルオウ・タケルノミコ・649-658）の「殯塚（もがりづか）」であると伝えています。

建王は、天智天皇（626-672）と越智娘の皇子、皇極（斉明）天皇（594-661）の孫にあたり、生まれつき声が出せず、8歳で亡くなったといわれます。建王を愛した女帝斉明はその晩年、建王を失った悲しみを歌にし、みずからの墓に建王を合葬するようにと言い残しました（斉明紀4年条）。その後、齐明天皇の墓は「小市（越智）」に造られました（天智紀6年条）。

現在宮内庁が治定する「越智岡上陵」（高市郡高取町車木）の表札には、「齐明天皇 孝徳天皇 皇后間人皇女 越智岡上陵 天智天皇皇子 建王墓」と記されていて、その墓への参道脇に、建王の実姉「大田皇女墓」もみられます。

斉明女帝の遺言どおり、建王が「越智岡上陵」に合葬されたかどうかは不明です。女帝が葬られた天智6年（667）2月27日条「是日。以皇孫大田皇女葬陵前之墓」の「皇孫」を「建王」とみれば、このとき大田皇女とともに女帝の「陵前」に葬られたこととなります。

この「本葬」に先立ち、建王のなきがらを置いた「もがりの場（仮葬塚）」が「今城谷上（いまきのたにのへ）」に起こされたと伝えます（斉明紀4年条）。ここでは、その「今城谷上」の比定地が問題となります。

享保21（1736）年開板の『大和志』（日本輿地通志畿内部巻20・大和国10吉野郡・陵墓の項）には、「建王殯塚（今日法具良塚）」という記述がはじめて登場します。明治27（1894）年以降の陵墓治定運動にともない、大正3年（1914）の『大和志料』下巻では「俗ニ保久良塚」の地が「建弭王殯塚」に比定されました。ただし、明治26（1893）年結了の『大和国古墳墓取調書』の中で、野淵龍潜は「字津角山の古墳（保久良古墳）」について「皇族以上ノ御墓ニハ無之ナラント推想ス」と記しています。昭和48（1973）年の『大淀町史』ではこの野淵の見解を採用しました<sup>(1)</sup>。また近年では「今城谷上」を明日香村内に求める意見もあります<sup>(2)</sup>。

時は移って平成21年4月、保久良古墳の町指定文化財指定への申請書が提出され、町文化財保護審議会でその審議がおこなわれました。

この古墳は、石室の遺存も良好で適切に保存されていましたが、詳しい調査がおこなわれず、規模・構造や築造時期等が明確でない点に課題がありました。これをふまえて町教育委員会では、平成22年12月から平成23年1月にかけて石室の簡易計測を実施しました<sup>(3)</sup>。続いて、平成23年6月12・13日、7月27日、9月30日にわたって、墳丘の雑木伐採と草刈、石室内の清掃、作業用簡易通路（スロープ）の設置を、町文化財調査会との協働で実施しました。

また、平成24年1月から3月にかけて、財団法人由良古代文化研究協会の助成をうけた研究者有志により、当古墳の墳丘および石室の測量・実測調査が実施されました<sup>(4)</sup>。

そして、当古墳のさらなる構造解明を目指し、

地元今木区の協力のもと、町の文化財保存・活用事業の一環として、町教育委員会および町文化財調査会の協働による発掘調査を、6月17日より24日(約1週間)の期間で実施しました。

## ii 調査の成果

### A 測量調査

#### 【墳丘】

保久良古墳は、現状で直径約15～20mの円墳と推定されます。北東から南西方向に傾斜する南北約30m、東西約50mの丘陵地を平たく成形し、その削った土を盛り上げて墳丘を造成したと推定されます(これを「後背面カット型の山寄せの古墳」といいます)。現存する墳丘の高さはもっとも高い西側で約4mです。

墳丘の東半は著しい削平をうけており、この削平にともない横穴式石室の最奥部が露出し、その北東隅の壁面石材が抜き取られたようです。先述の『大和国古墳墓取調書』には、墳丘の「根廻り(周囲)」の長さが記されていますが、墳丘が削平された記述はありません。

削平された時期は、同書がまとめられた明治26(1893)年以降と考えられますが、その詳しい事情はわかりません。

#### 【列石】

墳丘の西面には、今回の調査以前に、人頭大から人胴大の石材(近隣でとれる花崗閃緑岩)が並んで露出していました。この石材は、『大和国古墳墓取調書』の付図にも表現されています。

その最下部の標高が、後述する石室の床面(羨道部入口付近)とほぼ同じ高さなので、この石材は墳丘裾の基底部に設置された「列石」と想定されます(後述)。

#### 【石室】

石室は、人頭大から人胴大の近隣でとれる花崗閃緑岩を積みあげた横穴式石室で、ほぼ南にむけて開口しています。

石室の全長は約9.5mで、西側に約10cmの小さな袖部(張り出し)をもちます。石室はこの袖部を境に、奥の部屋「玄室」と通路部分「羨道」に分けられますので、玄室長は3.5m、羨道長は6mとなります。

また、羨道の中央部で側壁の石が乱積みとなっており、この箇所を境に、玄室側と入口側で側壁の構築方法に違いがみられます。これが当初からそうだったのか、「増築」などの行為の結果なのか、判断の難しいところです。

石室には土砂が流入し、玄室はその3分の1の高さまで埋まり、その中央部には大きな攪乱坑(掘り返された穴)があります。羨道部も大半が土砂で埋没し、大人がかがんで入るのがやっとの状態でした。

羨道部は幅も高さも1m程しかなく、天井石を置いてしまうと狭くて通れません。これは、古墳の築造中に埋葬が完了していたことを示唆する手がかりです。

石室の天井石は玄室に4つ、羨道部に5つ使われています。長辺2m前後、短辺1m前後の扁平な花崗閃緑岩を使用していますが、羨道部の天井石のうち2つには、両辺が2mをこえる石材も使われています。

なお、石室の中軸線はほぼ南北に沿っていますが、現存の墳丘の最高所から東側へ2mほどずれています。よって、墳頂部もすでに削平をうけており、当初の墳丘はさらに高かった可能性があります。

試みに先述の列石を墳裾とみて、石室(玄室)の中央に墳丘の中心を想定して円を描くと、墳丘の規模は径20m前後と想定されます。

## イ 発掘調査

### 【調査の方法】

調査にあたり、墳丘と石室内に「調査区」を設定しました。墳丘の調査区は、南北6m、東西2.5m（面積15㎡）で、すでに露出していた墳丘西裾の列石群の検出と観察、積み方などの構造解明を目的としました。

石室では、以後の調査と石室内の見学を容易にするため、羨道内に堆積していた埋土を行き来が容易になる任意の高さまで取り除きました。

また、石室各地点の土砂の堆積状況を調べるため、石室西側の側壁にそって羨道部1箇所、玄室3箇所（計4箇所）に調査区（深堀）を設定しました。墳丘と石室内の堆積土の基本層序は表1のとおりです。

表02 保久良古墳の基本層序

#### ・墳丘

**表土層**: 暗灰色の腐葉土。

**盛土層**: 墳丘整地・盛土。茶褐色のシルト質土(今回の調査はこの層を検出したのみ)。

#### ・石室

**I a層**: 暗灰色のシルト質土。玄室内と羨道部の玄室よりに堆積。高さ30cmを取り除いた。堆積の状況から攪乱された玄室内埋土の二次堆積と考えられる(遺物は主にこの層から出土)。

**I b層**: 茶褐色のシルト質土。I a層の下で検出。墳丘周辺からの流入土もしくはI a層(攪乱による二次堆積)以前の埋土(鎌倉時代)。

**II層**: 暗灰褐色の粘質土。玄室内(深堀3)で確認。石室の床面に敷かれていた粘土とみられる(今回の調査はこの層を検出したのみ)。

### 【遺構・墳丘】(PLATE01-03~08)

露出していた列石の規模を確認するため、調

査区の表土層を取り除いたところ、列石の集中部とその設置面が南北長さ3.5mにわたって検出されました。周囲を調べましたが、この集中部の南側は、攪乱ですでに石材が除去・削平され、集中部の北側でも、石材がほとんど崩落した状態でした。

列石は、墳丘西面の傾斜にあわせて、花崗閃緑岩の角石を4・5段の高さ(約1.7m)まで列状に積み上げ、墳丘裾にめぐらせたものです。その一部には、石室内の側石にも匹敵する、一边0.6mの大きな石材も用いられていました。

列石最下段の下面は高さがそろっていませんので、これを石列(および墳丘)の基底部(設置面)と想定しました。この基底部から、現在の墳丘頂部までの現状の高さを測ると、以前の想定どおり約4mとなります。

基底面のひろがりや、列石が墳丘全体をめぐるかどうかは、今後も詳細調査が必要です。

### 【遺構・石室】(PLATE02-09~14)

石室羨道部では、玄室よりに堆積していた埋土(I a層)の一部を、水平に高さ0.3mとり除きました。I a層は遺物を含んでいましたので、埋土を石室外へいったん搬出し、ふるいと水洗にかけて遺物のとりあげをおこないました。I a層はすでに攪乱された土ですので細分せず、出土遺物は層一括でとりあげました。

深堀1の埋土は大半がI b層で、炭化材の小塊も目立ちます。I b層からは鎌倉時代の土器・瓦器の細片が出土しました。また、深堀2・4でもI a層の下部にI b層が確認できました。

よって、I b層は鎌倉時代の石室内の堆積層、I a層は玄室中央部のI b層とII層を積み上げた「二次堆積土(攪乱土)」と判断しました。

攪乱坑より下部にある深堀3では、I b層の下に石室の床面(II層)が確認できました。

なお、I a・I b層とも、今木谷を流れる今木

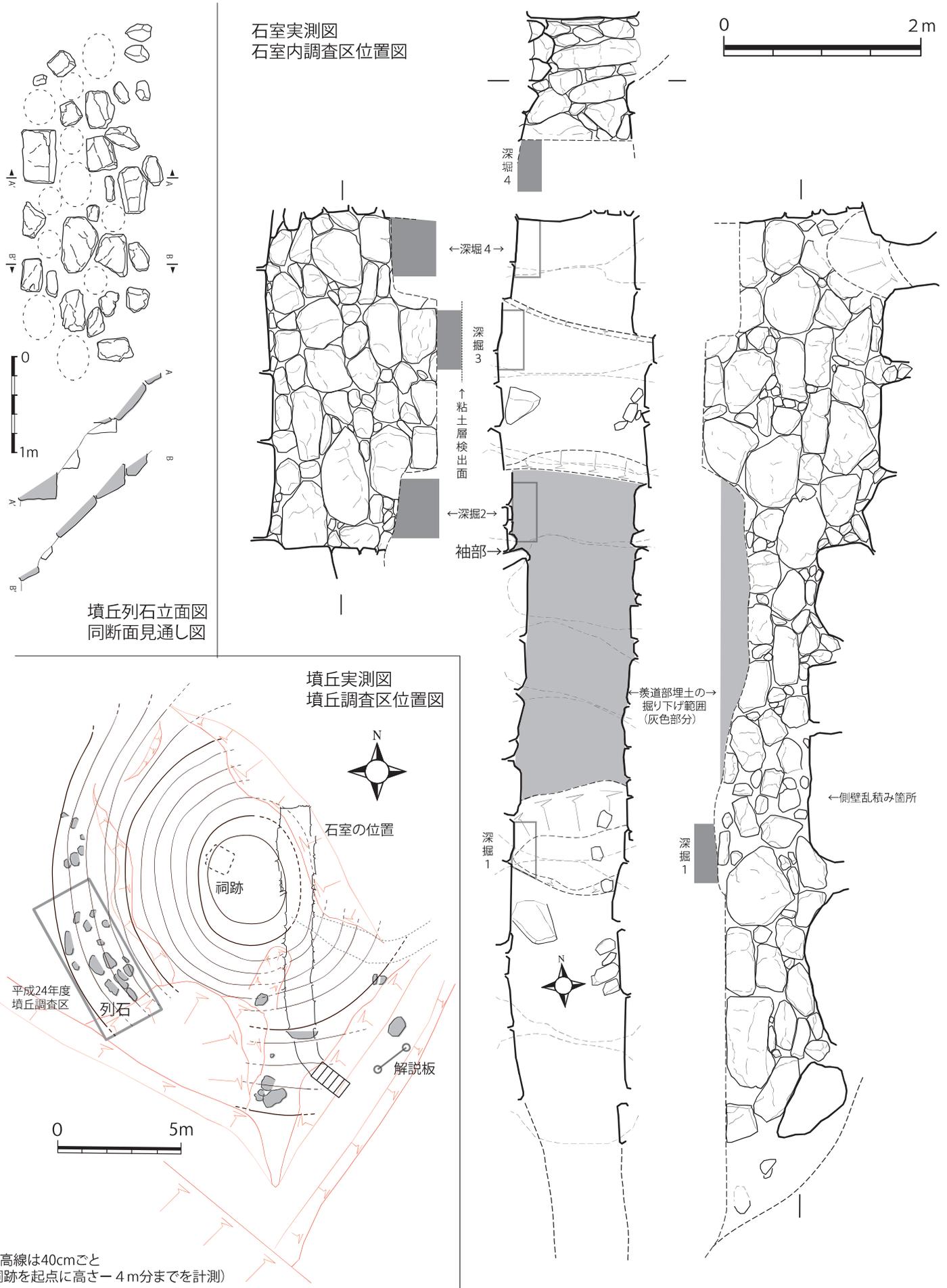


図06 保久良古墳の墳丘・石室実測図

川（曾我川水系）の河床にみられる、径5cm前後のチャート質の礫が多く含まれていました。そこで、河原から石室床面の敷石として持ちこまれた可能性を考慮して、一部をサンプルとして採取しました。

#### 【遺物】(PLATE02-15・16)

出土遺物は、石材（石棺材）、金属製品数点（鉄釘、鉄刀等）、玉製品（琥珀玉）1点、土器（土師器片）数点、瓦器数点があります。その大半が、石室内の羨道部埋土（Ia層）からの出土です。なお、平成23年度の石室内（羨道部入口付近）清掃時の採集資料（須恵器こね鉢・瓦器）についてもあわせて報告します。

#### 石材（石棺材）

大半は破片となっていて、調査でとりあげたIa層出土分だけでも土嚢袋で3袋分あります。この石材は、吉野川流域でとれる結晶片岩です。

#### 金属製品（鉄製品ほか）

Ia層出土の金属製品はすべて破片になっています。釘は、身部断面0.6cm四方、長さ6cm以上の個体が1点あります。釘を打ち込んだ木材の木目の残片が付着している個体も数点あります。また、古代以前の形態を示す釘の頭部が1点あります。これらは、いずれも古墳にともなう木棺を固定した釘と考えられます。

サビの進んだ鉄の塊まりのなかには、断面に鉄を叩いて鍛えた痕跡（鍛造層）のみえる個体があります。その断面（長辺1.5～3cm）が楔形の形状を示す個体は、鉄刀もしくは刀子の一部と判断されます。断面が0.7cm×0.4cmの長方形を呈する鉄鏃の頸部、長さ3.3cmが残る鉄鏃の茎部なども数点あります。

また、径0.2cm、長さ3.8cmの銅線をねじった金属製品が1点あります。ただしその用途は不

明です。1.3cm大の金属滓も1点ありますが、その時代は特定できません。

#### 玉製品（琥珀玉）

Ia層から1点出土。材質は、表面が風化でくすんでいますが、赤～橙色を呈する琥珀です。

長辺2.2cm、短辺1.3cm、最大厚0.7cmの平たい

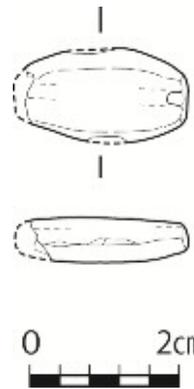


図 07 保久良古墳出土の琥珀玉実測図

豆形で、両面、両端はわずかに面取りされています。長辺の一部と、短辺側の片側の端部は欠損していますが、両辺端部に径0.15～0.2cmの穿孔がみられますので、装身具として利用されていたことがわかります。この孔は、両側から穿って中央で貫通させたものです。

#### 土器（土師器）

墳丘表土層より1点、石室埋土（Ia・Ib層）より数点出土しています。墳丘表土層出土の土師器は細片で、中世以降とみられます。

石室埋土（Ia・Ib層）から出土した土器のうち、焼成のあまい3点は古代以前の土師器碗の一部とみられますが、ほかは鎌倉時代以降の土師器皿の一部です。いずれも細片のため時期は特定できません。

#### 瓦器

石室埋土（Ia・Ib層）より数点出土しています。口縁の端に段をもち、蛇の目高台で、内面にミガキ調整をほどこす鎌倉時代の暗灰色碗です。同じ特徴をもつ細片が複数個体あります。

白色を呈し、内面にミガキ調整をほどこす瓦器片は、平成23年度の石室清掃時に羨道部入口付近から採集されたものです。また、器種は不

明ですが大型品とみられる破片もあります。いずれも鎌倉時代（もしくはそれ以降）のものと考えられます。

### 須恵器

東播磨産の須恵器のこね鉢が2個体あります。口縁の端部をつまみだす特徴的なもので、いずれも鎌倉時代後期のものと考えられます。

1点は墳丘北西部斜面での採集ですが、もう1点は、羨道開口部の西壁寄り埋土（Ib層）から平成23年度の石室清掃時に採集されたもので、口縁部から底部近くまで残っています（PLATE02-16左）。後者を観察すると、内面上半部は使用のため摩滅していますが、内面下半部は水成風化（液体の作用でぼろぼろになること）が著しいようです。この個体は、羨道入口付近に鉢を据え、内面下半部が常時滞水するような状況で、一定期間据え置かれていたものとみられます。

### iii まとめ

保久良古墳は、今木谷では最大規模をほこる単独墳です。石室内からは、石棺材とみられる吉野川流域でとれる結晶片岩片が出土しています。その背景に、吉野・紀の川流域とつながりのある、今木谷の盟主的な人物像もほのみえます。最後に、今回の調査の成果と課題をふりかえってまとめにしたいと思います。

#### 【石室と埋葬施設】

保久良古墳の横穴式石室（全長約9.5m）は、現存する吉野郡内の石室のなかでは、今木谷北方の大岩古墳群中の石神古墳（墳丘直径22.5m、石室全長10m）に次ぐ規模をもっています。

ただし、小さな袖部を片側にもつだけの無袖式に近い構造や、石室の大きさに比べて玄室の規模がやや小さく羨道が長いこと（玄室長3.5m、羨道長6m）もこの石室の特徴です。

石室内の調査では、玄室下で粘土面（II層）が確認され、床面が粘土敷きであった可能性をうかがうことができました。また、埋土中にチャート礫が多く含まれていたことから、粘土敷きの上に礫を敷き、その上に結晶片岩の板石による組合式の石棺を据え置く、という埋葬方法が推定できるようになりました。今後、粘土面と礫敷きとの関係や、石室内に排水溝等があったのかどうかも解明してゆく必要があります。

結晶片岩を石棺材に用いる事例は、産地に近い吉野川流域ではもちろん、先述の大岩古墳群をはじめ、その西方にひろがる御所市域（巨勢谷や巨勢山古墳群）、さらにその北方の橿原市域、高市郡内（高取町・明日香村）といった、大和盆地の南部地域でも多く確認されています。

羨道部の二次堆積土から出土した結晶片岩の石棺材と、同じ堆積土から出土した釘との関係はどうでしょうか。たとえば後者を、組合式の木棺をつないだ釘とすれば、①玄室内には石と木と材質の異なる棺が二つ並存したか、もしくは、②据付用の外棺（石棺）と運搬用の内棺（木棺）、という理解も可能です。

今後の石室内の床面の調査にあたって、石棺の据付痕跡や、釘の出土位置・分布などにも注意する必要があります。

#### 【年代】

築造年代については、時代の特定できる出土遺物がほとんどなく、厳密な年代確定は今後の調査に期待されます。

ただし、立地条件（背面カット型の山寄せの単独墳であること）、外部構造（円墳で葺石や貼石がなく墳裾に列石をともなうこと）、石室の特徴（玄室が小さく無袖に近いこと）から、7世紀前半～中ごろと推定されます。同じ今木谷にある正福寺（寺ノ下）古墳（7世紀後半代で無袖の横穴式石室）よりも古く位置づけられます。

## 【殯塚伝承の背景】

『大和志』の編纂者が、「今城谷上にある建王の殯場」を「今日法具良塚」に求めた理由は何だったのでしょうか。単に、「イマキ」という地名に拠ったものでしょうか。それとも、公伝にはない、何かの民間伝承に拠ったのでしょうか。

保久良古墳の所在地は、小字名で「津角山（ツカヤマ・ツカクヤマ）」といい、明治時代以前の今木村の垣内（カイト）名では「津角前（ツカマエ・ツカクマエ）」にあたります。塚（古墳）としての認識は、地名から江戸時代にさかのぼるとみてよいでしょう。

保久良古墳には、今でも墳丘頂部に花崗閃緑岩で組まれた祠の基壇が残っています。また、墳丘周辺や石室内からは、据え置かれたとみられる鎌倉時代のこね鉢や、同時代の瓦器片がみつき、石室開口部前の平坦面にも、中世・近世の土器・陶磁器が多く散在しています。鎌倉時代以降は古墳の石室が開口しており、周囲では古墳を意識した何らかの行為がおこなわれていたこともわかります。

これは、今木谷にある塚（古墳）数か所で認められる、祠や石塔をとともなう塚（古墳）信仰とのかかわりが考えられます。遺跡名称となっている「保久良」の意も、祠（ホコラ）+塚（ツカ）→ホクラ（ヅカ）へと転訛した可能性が考えられます。

塚（古墳）信仰は、地域の民俗事例としても検討対象になります。まつる集団（地域共同体）と塚との関連性、保久良古墳の塚信仰を支え続けてきた垣内「ツカマエ」の地域文化史の解明も今後の課題といえます。

殯塚伝承についても、周辺地区の悉皆調査をおこない、7世紀（飛鳥時代）以降の「信仰の場」としての古墳（塚）の実態を十分にふまえた後で、結論を出す必要があるでしょう。

## 【地域遺産としての保存・継承】

調査最終日の6月24日に開催した、今木地区住民対象の現地説明会（参加者約30名）では、町文化財調査会の発掘参加者もボランティア解説員として、丁寧なガイドを心がけました。

地元今木地区では、平成25年度から継続的にワークショップ「保久良古墳のこれらからを考える」が開催されています。地元区民、町行政、文化財ボランティア団体が協働で実施できる持続可能な古墳の保存・活用の方法や、古墳と建王の伝承を一体として受け継いでゆけるような地域イベントなどが検討されています。

また、大淀町としても、奈良県が推進する「記紀万葉プロジェクト」との連携ができる「地域遺産」として、当古墳のさらなる利活用を目指しています。古墳がもつ様々な資料的価値や、保存・活用のあり方も、今後議論しながら深めてゆきたいと思っています。



図 08 建王イメージイラスト

## 【註】

- (1) 小島俊次「歴史編第一章 考古学 今木の古墳」『大淀町史』大淀町史編集委員会 1973年。
- (2) 西本昌弘「建王の今城谷墓と酒船石遺跡」『飛鳥藤原と古代王権』同成社 2014年。
- (3) 大淀町教育委員会編「付 吉野郡内の横穴式石室墳」『平成19～22年度大淀町文化財調査報告』2011年。
- (4) 松田度「吉野の横穴式石室墳—その変遷と終焉—」『由良大和古代文化研究協会 研究紀要』第18 2013年。

PLATE 01 保久良古墳 調査写真1(墳丘)



01 遠景(西から)



02 近景(南から)



03 墳丘調査区遠景(西から)



04 墳丘調査区近景(調査前・西から)



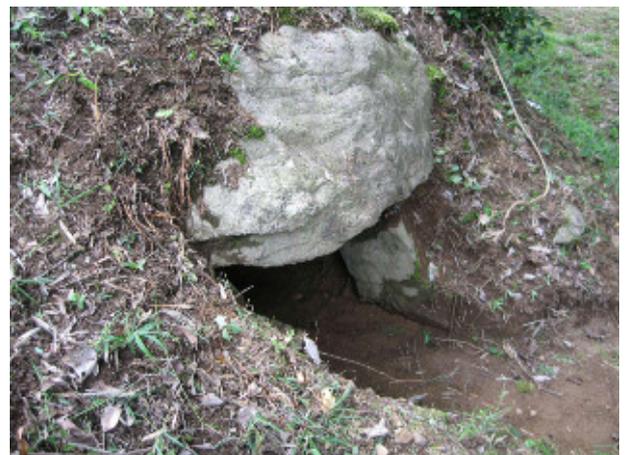
05 墳丘の列石検出状況



06 同列石近景(西から)



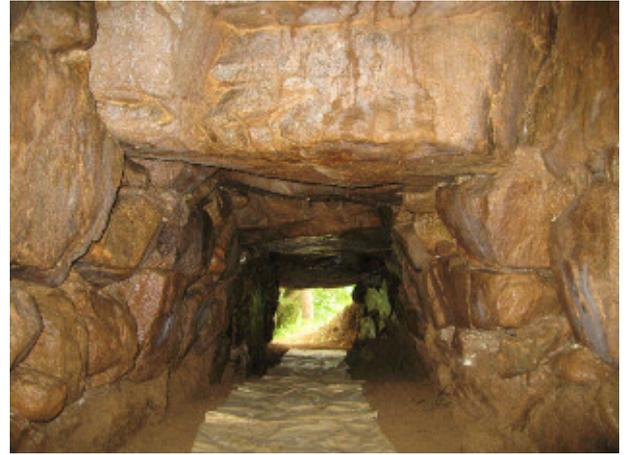
07 同列石近景(南から)



08 石室開口部



09 石室内(埋土除去後・開口部から奥壁をみる)



10 石室内(玄室から開口部をみる)



11 石室内深堀1



12 同深堀2



13 同深堀3



14 同深堀4



15 出土遺物1(琥珀玉)



16 出土遺物2(須恵器こね鉢・瓦器)

## 2 畝火山口神社の水取り神事

(平成24年度の調査)

### i 調査にいたる経緯

大淀町の民俗文化財についてのとりくみは、1973年刊行の『大淀町史』編さん以降目立った動きはありませんでしたが、近年になり調査や公開・普及事業が進んでいます。

平成16年(2004)、大淀町文化会館で奈良県主催の「紀伊半島三県民俗芸能祭2004」が開催されました。これをうけて町教育委員会は、平成17年に『大淀町文化財図録』を作成し、町内に残る民俗行事をひろく紹介し、その重要性の周知を図ってきました。続いて平成21年(2009)には、大淀町役場が一般財団法人地域創造の助成を受けてDVD『大淀町伝統歳時記』を作成し、町内に残る伝統行事の記録化をおこなっています。ただし、いずれも民俗文化財としての詳しい記録調査や報告書の作成にはいたっていませんでした。

平成22年、町教育委員会は、文化庁の支援をうけて「大淀町地域伝統文化活性化事業」を実施しました。具体的には、町内の主な民俗行事(5件)の記録調査と、ボランティア(現おおよど語り部の会)の育成事業等をおこない、その成果を平成23年9月25日に町伝統文化シンポジウム「大淀町の民俗—継承と活性化—」(町文化会館あらかしホール)で公開しました。

これらの成果については、平成23年刊行の報告書『大淀町の民俗—平成22年度の調査—』や普及用冊子『大淀町の民俗と伝統文化』、平成25年作成の普及用パンフレット『おおよどの民俗と伝統文化』として公刊されています。

大淀町土田地区でおこなわれている畝火山口神社の水取り神事(以下、当神事)は、名勝・大和三山のひとつ畝傍山と、奈良県有数の大

河・吉野川の水をむすぶ珍しい民俗行事として町内外にもよく知られており、『奈良県史』『橿原市史』『大淀町史』をはじめ、さまざまな刊行物で紹介されています。土田地区でも平成11年以降、神事の様子が映像記録として保存され、町教育委員会も平成18年より毎年記録撮影を継続しています。また、平成21年には奈良県地域伝統文化保存協議会が、文化庁ふるさと文化再興事業「地域伝統文化伝承事業」の一環として当神事の映像記録撮影と聞き取り調査を実施し、報告書も刊行されています<sup>(1)</sup>。

このような情勢をうけて、当神事を町指定の無形民俗文化財に指定してほしいとの申請書が、平成24年6月15日付けで土田区長・平田泰通氏(当時)より町教育委員会に提出されました。

### ii 調査の成果

#### ア 神事の概要

当神事は、畝火山口神社(橿原市大谷町)の宮司が、7月28日におこなわれる同社の夏季大祭(でんそそ祭)の神事用の水を汲むため、例年7月26日に土田地区の住吉神社へ参来し、吉野川沿いのケヤキウラ(ケヤキガフチ)とよばれる大ケヤキの樹下の川辺で水を汲む(取る)、というものです。

住吉神社は、吉野川の旧堤防に立つケヤキの樹下にはありましたが、大正元年(1912)、吉野軽便鉄道の線路敷設を機に、北方の土田神社(妙見宮)の境内に合祀されました。ただしケヤキ脇の旧社地には今でも小さな祠が残り、「住吉稲荷」と称されています。

ケヤキは、吉野川の北岸の旧堤防へとりつくように立っています。高さは15m。幹周りは人の胸の高さで測って約8m。枝の張り出しは東西40m。樹齢は推定700年とされ、奈良県下で

も有数のケヤキの大樹です。平成 10 (1998) 年の台風では枝が 1 本欠損しただけでしたが、平成 14 (2002) 年の台風で、ケヤキの西半分が倒れてしまいました。この倒木については、地元の人々のご神木だから容易にさわれないという意見も多いようです。平成 15 年 2 月 10 日、本町の町指定天然記念物となっています (平成 23 年、ケヤキ前に解説板を設置しました)。

当神事の内容は、①住吉神社での礼拝、②川辺での水汲みの 2 部に分かれますが、①は水を汲むため「住吉の大神」に許しをいただくといった主旨の祝詞奏上で、神事の内容は②となります。神事の具体的な内容も、しめ縄で結界された吉野川河畔の水取り場の前で、畝火山口神社の宮司が祝詞をあげ、川の水を汲みあげるという行為が目されます。この水は、畝傍山麓にある同社に持ち帰られ、祭礼の「ご神水」として本殿に奉納されます。

当神事は、土田区在住・井出奈良美氏の祖父の代、同神社の先々代宮司から続いているといわれています。50 年前 (昭和 30 年代) までは、畝火山口神社と井出家のみでおこなう行事でしたが、40 年前 (昭和 40 年代) からは土田区の役員がこれに加わり、当神事を維持しています<sup>(2)</sup>。

## イ 史料と伝承

宝暦 9 年 (1759) 「畝傍山口神社大谷家文書 (天理図書館所蔵)」所載の「畝傍山社祭礼ニ付寺社奉行へ返答状」によると、当神社から吉野郡土田村へ「水取り」にむかうのは、旧暦 6 月 30 日、9 月 12 日の年 2 回だったようです。

一、  
六月廿日大被  
神主同月廿七日ニ吉野川へ  
古うつ(り)取ニ参古例  
尤古来ヨリ同(吉野)郡  
土田村新四郎方着座候

図 09 水取り神事  
関連史料 (一部抜粋)

町北部の岩壺地区でも、10 月の秋祭りに際して吉野川の石と水を、吉野川河畔の下湊地区・鈴ヶ森へ取りにいったと伝えます。西方の佐名伝地区でも吉野川の石 (オシライシ) を取るという風習が残っていました (いずれも現在は断絶)。吉野川の石・水を持ち帰るといふ行為は、かつて大きな広がりを持ち、「吉野川へ禊に行つて来た」という証拠にもなったようです。

また伝承では、神功皇后の時代、大和盆地 (国中) へ吉野川の水がひかれた記念にお手植えされたのが川辺のケヤキだといひます。また一方、このケヤキを植えたのは神武天皇で、九州から吉野を通つて大和入りする途中、この川辺で休んだ際にお手植えされたともいひます。これらの伝承の背景は何でしょうか。

畝火山口神社では、毎年 2 月と 11 月、大阪市の住吉大社から「埴使い」がやってきて、新嘗祭・祈年祭に用いる土器を作るための神事 (埴取り) がおこなわれます (なお、畝傍山中で採取される「埴」は、カブトムシなどの甲虫の糞塊であることが指摘されています)。この埴取り神事は、『記紀』の神武天皇の伝承にもとづく「国占め儀礼」のひとつ、大和国の「物実 (代わりになるもの)」を取るという行為を示します。

吉野川の水 (吉野の物実) を神事に用いる畝火山口神社の水取り神事も、この住吉大社の埴取り神事とよく似ています。吉野川の水を大和盆地に流す分水計画は、江戸時代の元禄年間 (1688~1703) ごろからありましたが、実際に実現したのは昭和 31 年 (1956) のことでした。

このようにみると、先の伝承は、吉野川の水を欲しがった大和盆地の人々の願いを、神社の祭神である神功皇后に仮託したもの。また、吉野川沿いに葉を広げる大ケヤキに、神武天皇のイメージを重ねあわせようと、地元土田区で語り出されたものではないかと想定されます。

### ウ 記録調査 —神事の流れ—

ここでは、町教育委員会で記録している、平成18年から平成25年度までの神事の流れを記します（時間の記載は平成18年時のもの）。

#### 神事の流れ

9時30分ごろ：

宮司が車にて到着（先代の宮司は電車で）。井出家にはすでに数名が待っています。笹や注連縄などは2・3日前から、住吉神社への供物は当日の朝からすでに準備されています。



CUT 04 水取り神事の水取り場（平成20年撮影）

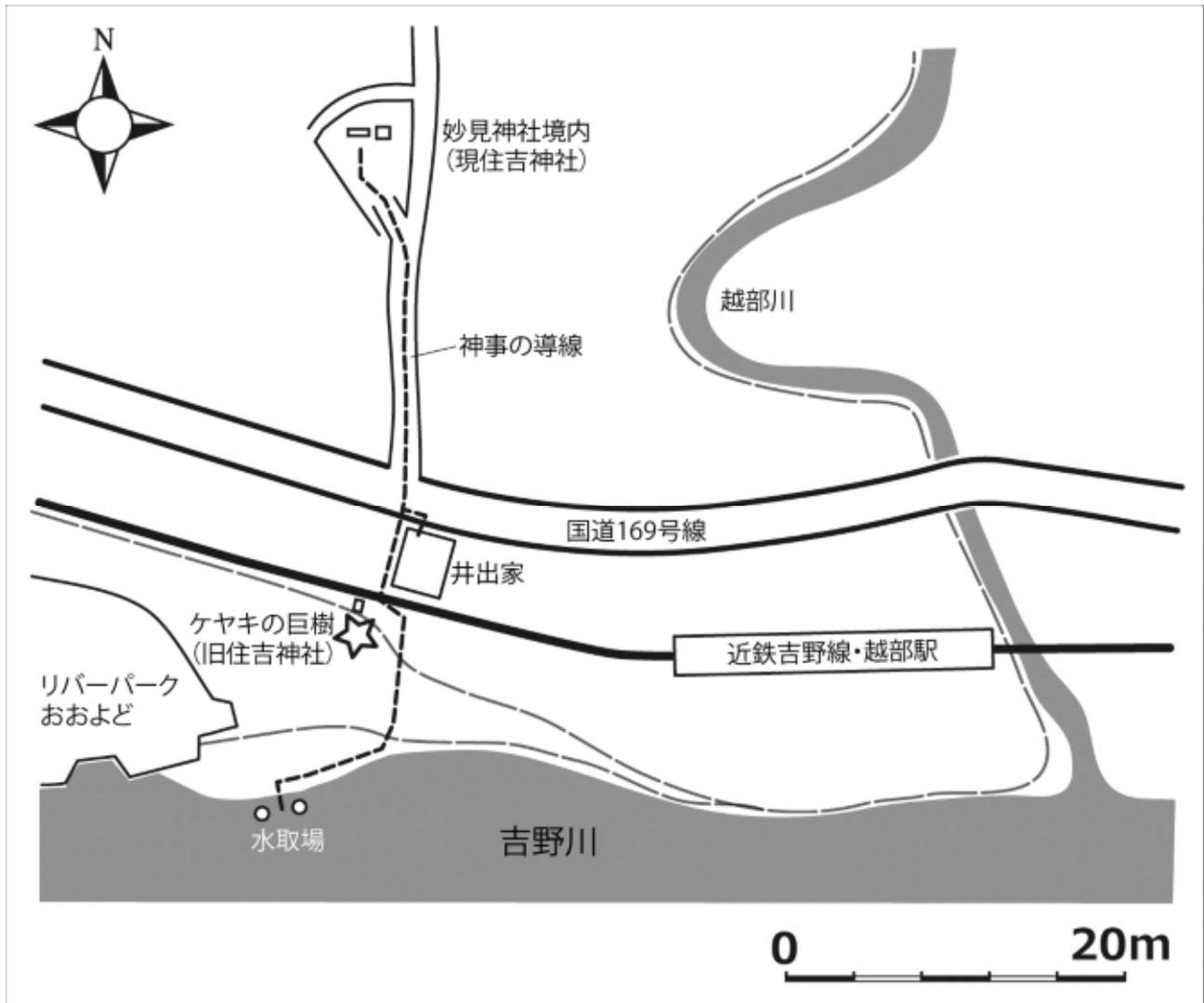


図 10 水取り神事関連地図

9時32分：

宮司が準備を始めます。井出氏と相談してサカキの枝にシデ（紙垂）をくくりつけます。参列者分の10～20本ほど。

9時39分：

参列者は神事のマワリをします。水汲みをする吉野川の川辺に笹を二本たて、注連縄をはり、シデをたらしめます。笹の根固めは、付近の川原石を積むだけ。数年前は、水を汲む直前に笹を立てました（現在は、前日から草刈や足元の整備などのマワリをします）。ケヤキの脇にある住吉稲荷（旧祠）にも供物がそなえられます。

9時47分：

住吉神社本殿にも注連縄・シデをつけます（他の社にはつけません）。

9時53分：

参列者は再度井出家へ戻ります。雑談しながら宮司の準備を待ちます。水を汲む一升瓶（桶）にもシデをつけます。一升瓶（桶）はとくに決まった形式はありません。

10時：

宮司から声がかかります。参列者は住吉神社へ移動。社殿前に供物をそなえて神事を待ちます（PLATE3 - 01）。

10時10分：

宮司の礼拝。神事が始まります。宮司を先頭に、参列者はその後ろに2・3列で並びます（PLATE3 - 02・05）。

10時12分：

祝詞の奏上。祝詞文は宮司が事前に毛筆で手書きしたもの。内容は代々ほぼ変わりませんが、「井出奈良美」の名前が鉛筆で脇に付け足されています（PLATE3 - 03～04）。

10時17分：

祝詞の奏上が終わると、参列者の礼拝（玉串奉奠）。井出氏が最初で、前列から順に役員（区長）の差配で礼拝します。シデをくくりつけた

サカキを宮司から受け取り、二礼二拝一礼で供えてゆきます。

10時26分：

礼拝の終了後、供物そのほかを撤饌。サカキのみを残していったん井出家へもどります。供物を片付けた後、順次ケヤキウラの吉野川の水辺へと下ります。このとき、ケヤキと住吉稲荷（旧祠）は素通りします（PLATE3 - 06～08）。

10時30分：

水汲み場に到着。川辺には笹竹に綱を張った結界（注連縄）があり、その前で礼拝と祝詞の奏上がおこなわれます。

川上（東側）の竹先にシデをつけたサカキを差し、その結界の下で一升瓶（桶）に水を汲みます。これらの一連の神事を、宮司が一人でとりおこないます。ただし、うまく汲めないときは役員がかわりに汲みます（PLATE4 - 09～13）。

10時34分：

水汲みを終え、一同は井出家へひきあげます。水を汲んだ一升瓶を持ちかえりますが、平成2年ごろまでは手桶で汲んで、井出家にもどって一升瓶に入れ替えたとのこと（現在は手桶と一升瓶を併用しています）。川辺の結界の笹とサカキはそのまま残して、神事は終了します。

10時57分：

井出家にて、末席にすわった井出氏が挨拶の後、食事（直会）が始まります。これが昼ごろまで続きます。

### iii まとめ —神事の評価と課題—

当神事は、史料により宝暦9年（1759）年までさかのぼることができます。250年以上続く年中行事であり、また、吉野川と畝傍山をむすぶ稀有な民俗行事とっていいでしょう。

当神事の世話方を続けている井出家と土田区役員が立ち並ぶなか、宮司一人で神事はおこな

われますが、以前は、地元の井出氏のみが立ち会い、神社からも幾人かの伴人をともなっていたといいます。このように、当神事のかたちは時代とともに変わっていますが、当初の姿からどのように変わってきたのかという記録はなく、詳しいことはわかりません。

平成 24 年 7 月の調査後には地区懇談会を実施しました。実施主体となる畝火山口神社・大谷仁紀子宮司や、地元住民の意見などを聞き取りし、現状の把握につとめました。

平成 25 年には上記の内容をもとに、町教育委員会の諮問をうけた町文化財保護審議会でも当神事の歴史的評価を検討しました。町文化財保護審議会では、平成 24・25 年度の計 4 回にわたり審議をおこないましたが、無形民俗文化財としての指定をするにあたり、①調査等によりその行事の内容が判明しているかどうか、②民俗行事が適切に保持され、継続性が確保できているかどうか、の 2 点を価値判断の基準としました。

①については、当神事が宝暦 9 年（1759）を初見とすること、その形態（世話方のあり方）や道具立ては、時代の流れとともに変わっていますが、本神事の本質、つまり「旧暦 6 月末（新暦の 7 月末）に、吉野川北岸の土田地区の川辺（ケヤキの巨樹の下）で祭礼用の水を汲む」という行為が、現在にいたるまで引き継がれている点が評価されました。

②については、水取り場の設置から祭礼用具一式の準備をおこなう地元土田区、本町土田へ水取りのためにやってくる畝火山口神社、両者ともに神事の継続に意欲的で、かつ両者の関係は良好に保たれていて、行事の継続性は十分に確保されていると判断されました。

以上のことから、当神事は、大和国中（大和盆地）の人々にとって吉野川の水がもつ意義を象徴的に示す民俗事例として、また、畝火山口神社の神事でありながら、地元（本町土田）の

人々が神事を支え、その保存・継承に大きな役割を果たしてきたという点で、本町の地域文化における貴重な民俗行事として価値を有すると判断され、平成 26 年 3 月 28 日付けで町指定文化財（無形民俗文化財）に認定されました。

なお、今後に残された多くの課題もあります。

当神事後におこなわれる畝火山口神社の夏季大祭（でんそ祭）とのつながり。同社の一連の年中行事のなかでの評価。同じく、吉野川を舞台とする、多武峯山麓の宮座の祭礼行事のひとつ「大汝（おなんじ）詣り」との関係も、さらに深めてゆく必要があります。

また、吉野川の景観保全とのかかわりで、本神事が果たしてきた地域文化史上の役割を明らかにしてゆく作業や、これからこの民俗行事をどのように保存・継承し、地域のまちづくりや活性化に活用してゆけるかといった議論も、深めてゆく必要があります。

#### 【註】

- (1) 武知邦博「第三章 奈良盆地の祭礼行事と吉野川 第一節 お峰のデンソソ」『大汝詣り—多武峯山麓の宮座の祭礼—』奈良地域伝統文化保存協議会編 2010 年。
- (2) 土田区では 7 月 31 日に青年会主催で同地区八幡神社の夏祭をおこなってきましたが、維持が難しいため主催が青壮年会にかわり、その後、土田区の子ども会が中心となって休日に実施しています。

#### 【参考文献】

- 原泰根「民俗編 第六章 宮座（座講） 土田の宮座」  
『大淀町史』大淀町史編集委員会 1973年。  
岸田定雄「わが町今昔その 8 吉野川の水汲み」  
『広報おおよど』209号 大淀町 1990年。  
岩井宏實ほか「第 1 章 祭事と芸能 デンソソ祭り」  
『奈良県史13 民俗 下』1998年。  
大淀町『大淀町伝統文化歳時記』（DVD）2009年。

PLATE 03 畝火山口神社の水取り神事 調査写真1(住吉神社から水取り場へ)



01 土田妙見宮境内の住吉神社



02 同住吉神社での礼拝



03 同神社での祝詞奏上1



04 同2



05 同3



06 同神社から水取り場へ移動



07 住吉稲荷(住吉神社の旧祠)



08 ケヤキの巨樹(大淀町指定天然記念物)

PLATE 04 畝火山口神社の水取り神事 調査写真2(水取り・畝火山口神社での奉納)



09 水取り場へ向かう参列者



10 水取り場での祝詞奏上(平成18年)



11 水取りのようす(平成18年)



12 水取り場での祝詞奏上(平成24年)



13 水取りのようす(平成24年)



14 神事についての地区懇談会(平成24年)



15 畝火山口神社の夏季大祭(奉納演奏)



16 同夏季大祭で本殿に奉納された水

### 3 大岩大日堂（平成24年度の調査）

#### i 調査に至る経緯

大日堂は、大岩地区の氏神・大岩神社（旧称水分神社）の鎮座する東大岩の丘陵中腹に建てられた、桁行3間、梁行2間、入母屋造の建物で正面に向拝がつきます。屋根瓦は棧瓦葺で、一部本瓦葺。建物内の本尊は平安時代作の町指定・大日如来坐像（平成23年、堂前に解説板設置）で、客仏として阿弥陀如来立像（旧安楽寺本堂本尊）などが脇殿に安置されています。



CUT 05 大岩大日堂近景（修復前・平成18年撮影）



CUT 06 大岩大日堂の鰐口（平成24年撮影）

向拝の上部（吊輪金具3箇所が残る）に取り付けてあったと伝える鰐口は、伝来の由緒こそ

不明ですが「永享2（1430）年 山城国（京都府）相楽郡賀茂・東明寺」の銘をもつ貴重なものです（現在大岩区が保管）。「大日堂の雨乞い行事」では、この鰐口を（鉦のように）鳴らしつつ、大日堂から丹生谷山中にある「ダイニチザカ井戸」（雨乞いの際、大日堂の屋根へほおりなげる泥をとる場所。大日如来がオタビラをかいていたという）までを往還したといひます。大日如来は、その井戸から大岩（大日堂）へ運ばれたとも伝えられますが、現在は雨乞い行事も断絶し、井戸も場所がわからなくなっています。

大日堂内には、貞享3（1686）年の「奉納御寶前」「和州吉野郡大岩村安楽寺」と記す棟札、延宝8年（1680）の鬼瓦等が残るほか、次の2つの「墨書札」があります。

（その1）表 為三界万霊有無縁等也  
裏 元禄10丁丑正月28日  
此施主 西誉宗南 比丘  
（その2）表 大日如来再興施主聖霊菩提也  
裏 元禄10丁丑正月28日  
此施主 西誉宗南 比丘

ここに「大日如来の再興」と記すことから、元禄10年（1697）が今の大日堂の初建年代となります。西誉は正徳3年（1713）に没した当寺の住職で、境内に墓石（供養塔）が残ります。

「安楽寺（山号・深法山）」は、北方の山中・舟倉山（高取町丹生谷）にあったと伝える元真言宗寺院のことです。1680年代以前に現大日堂北側隣接地へ移され、高市郡葛村（現御所市）樋野にある重信院（浄土宗）の末寺になったといひます。安楽寺本堂は、明治2年（1869）の台風後に修理がおこなわれ、「寺子屋」になったといひますが詳しくは不明。明治9年（1876）の大日堂内部の改修後、安楽寺の本尊等が大日堂に移され、明治30年（1897）には安楽寺本堂が解体されています。なお、現在大日堂にかか

る扁額「安楽寺」は儒者・藤沢南丘（1842-1920）の筆によるもので、扁額が大日堂に移されたのもこの解体時とみられます。

残された大日堂は、昭和 15 年（1940）4 月 28 日に修理されました。この修理以降、大日堂も屋根材の腐食等で雨漏りなどが生じ、本尊仏等への影響も懸念されていました。

平成 15（2003）年 2 月、本尊の大日如来坐像が大淀町指定文化財（彫刻）に指定されました。それ以後も地元からは度々、大日堂修理の要望が大淀町に出されました。大淀町は、建物自体は町指定の建造物ではないため、修理費用の補助を出し難い状況にあったので、改修工事のめどがたらず数年が経過しました。

その後、倒壊の懸念があった大日堂の山門が地元有志の普請で修理され、続いて大日堂の屋根の修理工事を進めようとの話がまとまり、平成24年度中に大日堂の屋根を修理する計画がたてられました。修理にあたっては、古建築としての形態を維持し、江戸時代の寺院建築の姿を後世に伝えてゆこうとする地元の要望から、寺社仏閣の設計施工に詳しい業者（篠田建築・生駒）に依頼がなされました。

その間、平成 22 年（2010）10 月、地元から依頼をうけた田原本町在住の林清三郎氏（元奈良県文化財保存課・田原本町文化財保護審議会委員・古建築専門）が、大日堂の簡易調査を実施し平面略図を作成されています（後述）。

町教育委員会は、地元区の要望と上記の調査成果をふまえて、修理工事とあわせて屋根の小屋組の構造を記録するため、工事の立ち会い調査を実施する旨を地元伝えました。

調査は、工事作業の写真撮影と小屋組の観察を主眼として、平成24年（2012）12月（5・10・14日）、平成25年（2013）1月（11日）に実施しました。なお、調査期間の制約等で、寸法等の計測に時間がさけなかったことを付記します。

## ii 調査の成果

まずは、大岩区保管の林氏の調査報告をもとに大日堂の構造を整理します（以下は再録）。

### ア 建物の概要

集落の高台にあり、急な石段上には新装なった表門（山門）があり、眼前に本堂が西面する。本堂は正面 3 間、側面 2 間、四周の縁に縁柱を建て、正面に 1 間の向拝が付く。軒は 1 軒疎垂木。縁柱を延ばし、内法貫を組み、軒桁で垂木を受けている。深い軒の出であるので、当初より縁柱があったとみられる。

#### 【向拝】

向拝、方柱上部粽付、虹梁、木鼻、中備臺股、手鉾み等は、元禄まで戻ることなく、幕末頃のものであろう。しかし、柱天端の大斗、連三ツ斗は当初のものとみられる。正面縁柱中央間に架かる虹梁、木鼻、中備臺股も向拝上部と同手法であるが、柱天端の大斗、実肘木は当初のものであろう。

#### 【身舎】

身舎軸部は円柱で、内外背面を除き、内法長押を廻し、正面、側面外側に縁長押がとりつくが、すべて当初のものと思われる。

正面中央間は、上部格子、下部横舞戸の建具引き分け。両端間は、ひし形の連子窓。両側面前端間は板戸引き違いとなっている。

内部の円柱上部には、大斗を置き、実肘木を組み、柱天端通りに頭貫が廻っているが、柱、頭貫、大斗、実肘木等は、彩色が施されていたようである。

内部の天井は、高く張られた竿縁天井であるが、すべて後補のものとなっている。中央には唐破風造りの厨司を据え、大日如来像を祀る。この厨司も成が高く不均等なものであるが、元

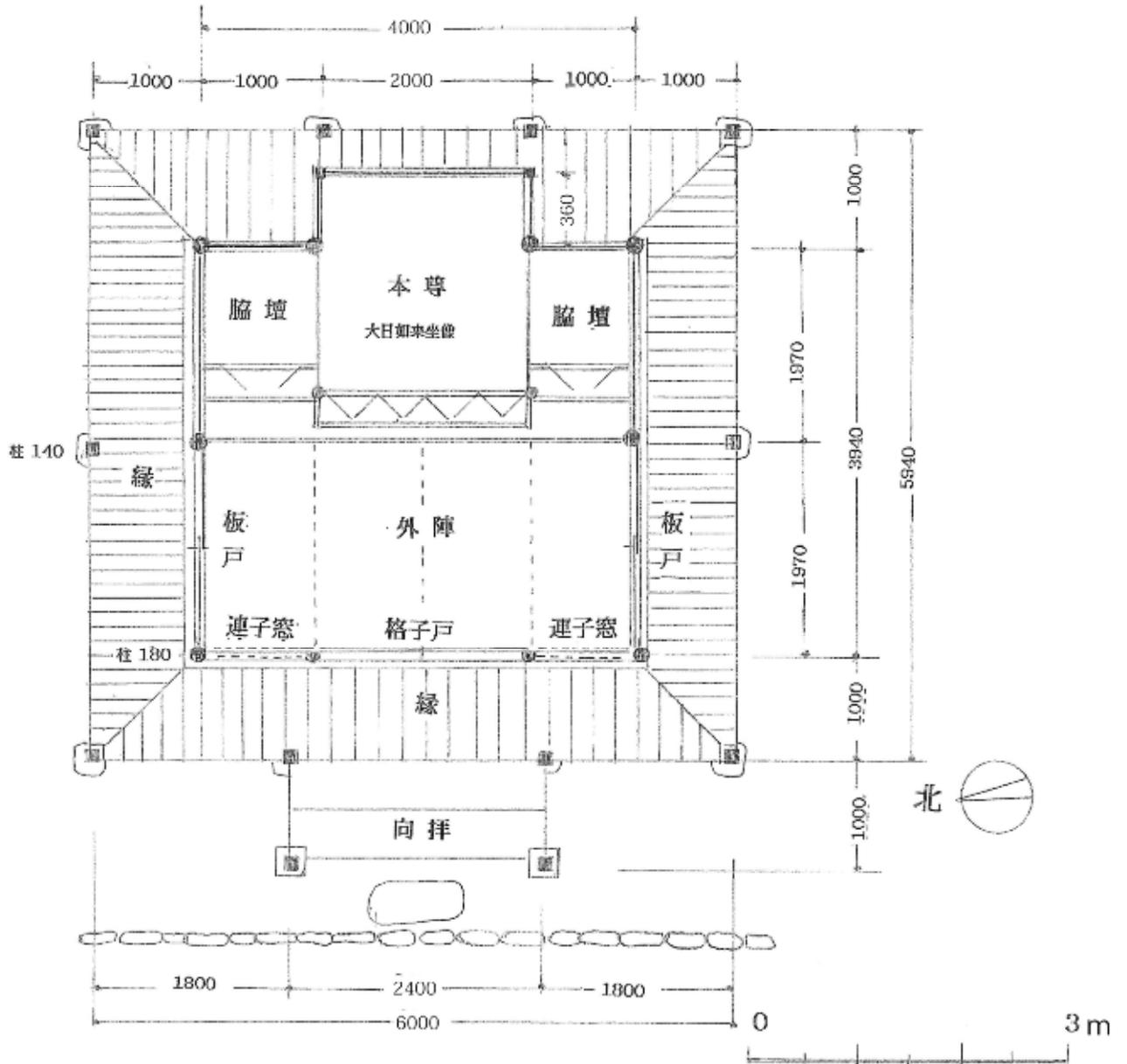


図 11 大岩大日堂の平面略図（林清三郎氏作成）

禄時代頃のものであろうか。

両脇壇は、やや奥まった位置にあり、両開きの卷障子を組み、その上部は、新しい仕切り板を付けている。

床は全面畳敷き、縁板は木口縁として、幅の狭い板が張られている。

**【屋根】**

屋根は入母屋造り棧瓦葺き。大棟、隅棟とも、

鬼瓦仕舞であるが、両妻部分にやや古い棧瓦も散見できる。正面向拝部分は、本瓦葺きの際は、袖丸瓦を使用して葺甲部分を納めるが、棧瓦葺きに変更されているので、無理な納まりとなっており、随所に雨漏りがあるらしい。今後屋根小屋組の調査も必要とみられる。

**【小結】**

以上、小雨の中、短時間の調査であり建物の

再建、移築、仏像の移転等問題点も多少残されているが、現時点での報告とし、今後の調査にゆだねたい。

最後に。無住寺になって久しいが、深い信仰と共に、地域の人々が、協力して再度の修理を繰り返し、貴重な文化遺産、町指定の「大日如来像」の建物を維持されている事に感謝いたします。

今後とも、是非後世に継承して頂けるよう関係各位のご協力、ご支援を切望する次第です。

平成22年10月28日

S. Hayashi

## イ 小屋組の修理

### 【修理にともなう立会調査】



CUT 07 墨書のある板材  
(平成24年撮影)

今回おこなった調査は、林氏の報告で課題となっていた小屋組の観察記録を目的としました。

建物を支える軸となる丸柱は、上部に大斗をすえますが、その上の小屋組部分に隠れている雲形の実肘木も、創建当初（元禄期）のまま残されていました。

外陣の空間を確保するためか、本尊を安置する主壇は、創建当初より奥に飛び出す角屋風の形態だったこともわかります。

また、蓮花や雲文ほかの彩色板の断片が

屋根の垂木下の野地板として残っており、天井板が再利用されたとみられます。よって天井は当初、楮紙貼に彩色・装飾が施された板張りであったと想定されます。上記以外の屋根の小屋組・外装・内装（竿縁天井）は明治・昭和期に補修されているとみられます。

小屋組には古材の転用が目立ち、判読の難しい記号的な墨書のある板材・垂木材が各所にみられました。これらの主なものについては、修理にともない取り外されたため、できるかぎり記録写真をとりました。

### 【瓦の銘文】

小屋組の調査時に確認できた瓦には、鬼瓦6、平瓦1、丸瓦2、飾瓦の一部2、丸瓦（鳥衾）1があります。本瓦が多く、創建当初の瓦が屋根裏に残されていたと考えてよいでしょう。

鳥衾に押印された「柏半」は、御所・柏原の瓦屋号です。鬼瓦の銘文には、向かって右側面に「延宝八年（1680年）勘兵衛」、同左側面に「ふしわらのあつそん 宗次」（藤原朝臣 瓦師名）、他の鬼瓦には向かって右側面に「土田住人 勘兵衛 作」とあります。この銘文から、安楽寺の移築、大日堂（大日如来）の「再興」に、「土田の瓦師」が関与した事などもわかります。

### iii まとめ

大淀町大岩は、明治22年（1889）以前は吉野郡大岩村で天領でした。戸数は明治期から25戸前後で大きく変わっていませんが、少子高齢化で人口は最盛期の2分の1以下（約60人）となっています。また、昭和60年代のゴルフ場開発のために、かつての景観は一変しています。

そのなかにあって、古建築としての大日堂とその本尊・大日如来像の存在は、大岩の歴史を物語る生き証人として貴重です。

大日堂の建立年代は元禄10(1697)年で、度々の改修を重ねていますが、基本構造は当初(17世紀末頃)の姿をとどめていることも今回の調査でわかりました。堂内に残されていた瓦から、創建時は本瓦葺であったと推定されます。

大淀町内で、仏堂の初建年代がおさえられる事例(いずれも鬼瓦で)としては、中増・安養寺権現堂(宝永元年<1704>)、同観音堂(享保7年<1722>)、西増・専念寺本堂(享保5年<1720>)、奈良県指定の比叢・世尊寺太子堂(享保7<1722>)があります。17世紀にさかのぼる大岩大日堂は、町内に残る最古の現役建造物としても価値あるものといえます。

課題としては、当初の部材がどの程度の割合で残存しているのか、改修の履歴と後補部分の材との違いや、境内に供養塔を残す安楽寺の浄土僧たち(西誉ほか)が大日堂を再建した「理由」などを明らかにしなければなりません。

今後さらに、専門的見地からこの大日堂の構造を調べてゆく必要があります。

また、同じ丘陵のうえにたつ大岩神社には、花崗閃緑岩でつくられた柱座(径63cm)と舍利孔(径17cm)をもつ心礎の断片が、手水鉢に転用されて残っています。これが安楽寺や大日堂とどんな関係にあるのかも、今後の課題です。



CUT 08 大岩神社の手水鉢(塔心礎か)

改修工事が完了した平成25年4月20日(土)には、地元大岩区民を対象とした「大岩大日堂調査報告会」(町教委主催)を開催しました。

会場では、町内で現存最古となる建造物が地元に残っていたことへの驚きと、貴重な建築を後世に残す普請を決意したことへの安堵感など、様々な感想が聞かれました。また、謎の多い大日堂の本尊の由来や、氏神・大岩神社に散在する寺院の礎石の由来などにも、質問が集中しました。

報告会を主催した大岩区長・小西正久氏からも、大日堂の文化財としての保存・活用にむけての展望が述べられました。また、その重要性を周知する解説板の設置や、今回の調査成果をまとめた、大岩地区独自の歴史と文化を紹介するパンフレットの作成など、今後の展開に有益な意見・要望も出されました。

上記報告会の後、大日堂の簡易調査報告書を作成した林清三郎氏に相談をしました。林氏からは、自身は高齢のため十分な協力はできないが、調査にあたって協力は惜しまないし、信頼できる有識者を紹介・推薦するとの指導をいただきました。その後、林氏の推薦により本町の文化財保護審議会委員として文化財建造物に詳しい植田哲司氏(元奈良県文化財修理事務所)を迎えて現在にいたっています。

なお、今回の調査で撮影した記録写真等は町教育委員会で、改修工事で不要になった古材などは大岩区および大日堂で保管しています。

本報告で十分記載ができなかった様々な文化財的情報について、より多くの有志の方々が、多方面にわたって活用されることを望みます。

#### 【参考文献】

大淀町史編集委員会『大淀町史』1973年。

大淀町教育委員会編「木造大日如来坐像」

『大淀町文化財図録』2006年。



01 大日堂近景(修理中・北西から)



02 同屋根背面(修理中・北から)



03 同屋根背面の軒桁と張出部(東から)



04 同屋根南東角の板張1(北から)



05 同屋根南東角の板張2(裏面・北から)



06 同屋根からみつかった朱彩色板



07 同屋根南東角の大斗と肘木



08 同屋根背面中央の大斗と肘木

PLATE 06 大岩大日堂 調査写真2(屋根小屋組2)



09 大日堂正面の小屋組上部1(近景)



10 同2(溝のある転用部材)



11 同小屋組内部



12 同妻側(大棟下の土壁)



13 同北東隅尾垂木の隅瓦



14 墨書のある垂木材



15 大日堂修理後全形(正面)



16 同全形(北から)

## 4 世尊寺の文化財 (平成24・25年度の調査)

### i 調査に至る経緯

本町比曾に所在する曹洞宗寺院・世尊寺は、かつて現光寺(比曾寺・比蘇寺)と呼ばれた真言律宗時代の文化財を含めて、数多くの宝物を所蔵しています。

その全容はまだ明らかになっていませんが、大淀町教育委員会では、平成19年(2007)に寺所蔵の現光寺縁起絵巻(町指定文化財)の調査を、平成22年(2010)に寺所蔵の版本(計57点)の調査を実施し、江戸時代から昭和初期(17世紀～20世紀)にわたる世尊寺の歴史を調べてきました<sup>(1)</sup>。平成24年からは、世尊寺所蔵資料のうち、寺所蔵の聖教関係の資料調査をすすめることになりました。

その調査・整理は今も継続中ですが、曹洞宗関連のものが大半で、古文書から典籍、軸物と多様な文化財群が残されています。とりわけ、曹洞宗中興の祖とされる月舟宗胡(1618～1696)の書跡「国」は、保存状況も良好で美術作品としても価値の高いものです。また典籍として、開山・雲門即道(1691～1765)写筆の「正法眼蔵」(巻1～7)全75巻および拾遺5巻が完存し、保存状態も良好で、江戸時代の吉野の禅門研究を進めるうえで欠かせない資料といえます。

### ii 調査の成果

#### A 世尊寺開山・雲門頂相

上記のとおり調査を進めていた平成24年の9月、住職から開山・雲門の頂相について調査の機会をいただきました。

世尊寺所蔵の雲門頂相は3幅あります(以下A～C)。いずれも軸装・絹本着色で、雲門生前の18世紀代のものです。Aには「宝暦乙亥 仏

成道の日」とあり、これは宝暦4年(1755)12月8日を指しています。銘に「是字寺現靈鷲山」とあるので、雲門が64歳のとき、「是字寺(愛知県岡崎市・龍海院)から世尊寺へ入寺した後のものとわかります(世尊寺の開山は寛延4年の1751年です)。

頂相Bは、雲門が「是字寺」在住時のものです。これらは、雲門からそれぞれの寺の後継者たちに与えられたものと考えられます。

平成24年7月、天理市在住の辻村豊彦氏より、さらに古い頂相Cが世尊寺に寄付されました。頂相Cは、辻村豊彦氏先代が愛知県の仏壇店にて仏壇を新たに購入した際、偶然知り合った骨董商より買い求めたものです。そこには土佐派の京都絵師・土佐光成(1647～1710)の印と「前大道現龍海」の銘があり、雲門が三世を継職した大道寺(大阪市)を出て龍海院に入寺し、後継者に与えたものとわかります。この頂相は龍海院で護持されてきた後、寺外へ流出したと思われる、それを辻村家が仏壇とともに買い取られたのでしょう。

表03 雲門頂相(3幅)の計測値(cm)

	総丈	本紙	軸幅	軸先
頂相A	188×51.8	118×40	56.5	象牙
頂相B	179.5×55	100×45	59.5	象牙
頂相C	191×47	99×35	53	朱漆塗

頂相A・Cは絵像に共通点があり、曲録に座して黒の法衣をまとい、緋色の袈裟を片掛け(偏袒右肩)にしています。

頂相Bの絵像は赤い法衣であてやかな袈裟をつけ、賛・印にAとの共通点が多く見出せます。

成立年代は、絵像や賛の文言から推定すると順にC→B→A(1755年)となります。

賛は難解な文章で、『碧眼録』など曹洞宗の聖

教をもとに作られています。文章からは、それ相応の地位にいたっても自分を磨き続けた雲門の厳しい修行態度と意志が感じられます。上記の3幅の頂相は、雲門の生き方、思想とその履歴を伝える貴重なものといえます。

以下、3幅の頂相の賛文の翻刻案を記します（□は未決文字）。翻刻にあたっては、町文化財保護審議会委員の井道子氏、文化財調査会の石川正氏に助力いただきましたことを付記します。

### ①雲門頂相 A（世尊寺蔵）

雲門御紋㊦

咄箇老凍腦 □安拳觸處振  
説非兮説是 欺鬼兮欺神  
喝下兮玄要 持頭手眼親  
咄

□何峯頂上坐 殃累及座々  
宝曆乙亥 佛成道日

□勤右是字現靈鷲山僧雲門自題  
棒頭手眼親㊦ 即道之印㊦ 雲門㊦

### ②雲門頂相 B（世尊寺蔵）

窓未竟㊦

咄箇窮措大 对牛□固鼓琴  
□案拳打湖海 枵腹問古今  
呵佛兮罵祖 追鹿兮攫金  
天下人不肯 臨濟有□玉峯  
咄

斤斗翻□外千年事□敢過  
吸江一左忝

□勤右是字寺雲門叟自題  
棒頭手眼親㊦ 雲門㊦

### ③雲門頂相 C（辻村家旧蔵）

朱印

□邁葉眼目 遠歸織看 大海枵腹  
須彌視姿 一三三四 好彩古寄  
正当恁麼 時阿那箇 是禪杜多  
問若缺運 分明不別

前大道現龍海雲門叟自題  
雲門㊦ 即道之印㊦

（右下）土佐守將鑒光成 謹寫 善識㊦

## イ 世尊寺本尊・阿弥陀如来坐像

阿弥陀如来坐像は、『日本書紀』欽明紀14年条に記す「放光樟像」として本堂に安置され、明治24年（1891）7月4日付けで「本尊釈迦如来像…優等ニシテ美術上ノ模範トナルベキモノト認定ス」との鑑査状を「臨時全国宝物取調局」より受けています。ただし、制作年代等は不詳で、詳細調査も実施されていませんでした。

平成24年（2012）2月1日、世尊寺から大淀町に提出された所蔵文化財の保存・活用についての要望書（防災対策への助言と補助）にもとづき、大淀町教育委員会と世尊寺が話し合った結果、最優先で奈良県指定・木造十一面観音立像（奈良時代作）の修理が平成26年度におこなわれることになりました。

そこで、平成25年6月12日、奈良県教育委員会文化財保存課の神田雅章・佐藤大両氏、公益財団法人美術院（以下、美術院）の陰山修氏が来寺し、修理に先立つ観音像の現況観察とあわせて、懸案となっていた阿弥陀如来坐像の詳細調査を実施しました。

その後、あらためて同8月19日、神田氏と長谷洋一氏（関西大学文学部教授・近世彫刻史）による詳細調査も実施されました。

調査の結果、阿弥陀如来坐像の胎内に墨書が発見されました。これについては、すでに長谷氏による詳細な論考<sup>(2)</sup>が公表されていますので、ここでは奈良県教育委員会文化財保存課作成のレポートと長谷論文に拠りながら、調査の成果をまとめたいと思います。

### 【坐像の概要】

種別：有形文化財（彫刻）

名称及び員数：木造阿弥陀如来坐像 1 軀

法量：像高128.7 c m（4尺2寸5分）

形状：肉髻をあらわし螺髪彫出。白毫相。耳朶

表04

阿弥陀如来坐像  
の寸法 (cm)

像高	128.7
白毫高	109.5
頂～顎	44.0
面長	26.2
面幅	27.4
耳張	29.5
胸厚	31.0
腹厚	33.5
臂張	72.7
坐奥	72.0
膝高左	18.7
膝高右	18.5

貫通。三道相。大衣は左肩を覆い、右脇腹を通して左肩にかかり（偏袒右肩）、右肩に覆肩衣をつける。両手は腹前で阿弥陀の定印（第1指と2指を捻じる）を結ぶ。裳を着し結跏趺坐する。

#### 品質・構造：

寄木造り古色仕上げ。頭部の全てと軀部前面を古材とみられる広葉樹の一材から彫出する。頭部は内割りせず彫眼とする。白毫水晶（後補）。

他は桧材を用い、軀部背面は縦に3材を矧ぎ、肩から腕を含み地付に至る。体側部は左右とも

上下3材を寄せ、背面に小材を補う。

上膊前面から前膊にかけて左右とも各1材で、定印の手首先は左右共木一材とする。脚部は前半部1材、後半部上面1材、左右外側各1材を寄せる箱形で、左右の大腿部付根に各2材を矧ぐ。裳先1材。表面は透漆塗り。像内内割り面に薄く漆をかける。台座及び光背を亡失。

#### 【銘記等（胎内背面の墨書 縦書き）】

放光佛再興意趣者  
尊師清空源徹上人  
為 追慶加修造者也  
悲母玉室妙泉禪定尼  
維時元禄十三辰天  
四月佛生日再興始同五月晦日修復終  
再興沙門當寺可空  
京七条定朝廿三代法橋大仏師  
左近家城康住  
前川市兵衛  
原田源兵衛

（以上、県文化財保存課作成資料より抜粋）

#### 【阿弥陀如来坐像の評価】

世尊寺本尊・阿弥陀如来坐像については、古様を示すものの制作時期の特定が難しく、これまで漠然と平安時代や「藤原初期」と推測されるに過ぎなかった。先般奈良県教育委員会文化財保存課によって阿弥陀如来坐像の調査が行われ、胎内から「元禄十三年」「法橋大佛師左近家城康住」などの墨書銘があることがわかり、本像は元禄13年（1700）に再興されたことが判明した。家城左近の事績として、また衰退著しいとされた近世比蘇寺の復興を物語る貴重な作例とみられる。

比蘇寺に阿弥陀如来坐像が安置されるのは、『日本書紀』欽明14年条に脚色を加えた『日本霊異記』以降の「放光樟像」伝承に基づく。しかし、中世から近世にかけて比蘇寺での「放光樟像」伝承に基づく阿弥陀如来坐像の存在は忘れ去られたものと想像される。そうした間隙をぬって、金峯山寺世尊寺は、延宝8年（1680）の京都・仏光寺での「吉野山世尊寺之仏像」の出開帳記事にみるように、同寺本尊であった釈迦如来立像に放光仏伝承を付加させたのではないかとも思われる。元禄13年の阿弥陀如来像再興は、比蘇寺からみれば「放光樟像」の伝承の正統性を示すためにも重要な意味をもつものであった。

阿弥陀如来坐像の特徴としてあげられるのは、古材をもとに改造した面相部の表現であろう。こうした面相表現は一般にみる江戸時代の仏像には認められず、強いてあげれば飛鳥仏を彷彿とさせる表情を示しているとでもいえよう。

再興を行った家城左近は、浄土宗本山知恩院と深いかわりのある仏師であると考えられる。なぜ、鎌倉時代以降真言律宗であった比蘇寺の阿弥陀如来坐像再興に浄土宗知恩院との関係の深い仏師が関与したのか。

世尊寺が所蔵する享保10年(1725)の版木「大和国吉野郡比蘇寺鑄鐘募縁序」や、これと関連する版木「金堂并太子堂建立勸化袋」によると、講堂が残った状態で、阿弥陀如来像の再興、太子堂の建立、「常行念仏」の開闢という比蘇寺復興の順序をたどることができる。これにより近世比蘇寺は、この頃に真言律宗から浄土宗、そして現在の曹洞宗へと転宗していったことが推測できる。

世尊寺(比蘇寺)東方に隣接した浄土宗法輪寺は、比蘇寺の塔頭(子院)であったとされるが、元禄5年(1692)4月以降、本山直末となっている。その檀信徒は同時に、比蘇寺の庇護者であったとみられる。

彼らによって、本山知恩院と関係の深い家城左近が起用され、比蘇寺の阿弥陀如来像の再興がなされ、常行念仏の開闢がおこなわれたが、享保18年(1733)3月に起こった法輪寺の全焼によって比蘇寺の再興も中断し、法輪寺の再建後、両寺は別個の住職を迎え宗旨をたがえて、今日まで法灯を継いでいるのである。

金峯山寺をはじめとする吉野の寺院は、古代・中世を通じて修験道を軸とした真言・天台系寺院が主流であったが、近世になるとその事情は一変し、浄土真宗、浄土宗、曹洞宗に改宗していった寺院は枚挙にいとまない。

こうした状況のもとで、比蘇寺も「放光樟像」である阿弥陀如来像の再興が、浄土宗法輪寺檀信徒の手によってなされ、代官・中坊氏から「念仏料」として5人扶持の寄進を受け、その後は禅僧・朴道秀拙の入寺を経て、雲門即道により「霊鷲山世尊寺」と山号寺号を改め、曹洞宗となったことで、「比蘇寺」の法灯と「放光樟像」伝承が今日まで受け継がれているのである。

(以上、長谷洋一氏論文を要約)

### iii まとめ

平成19年から平成25年にわたる世尊寺所蔵資料の調査で、近世前半期の比曾寺の復興運動と、世尊寺としての再興(開山雲門の入寺)までの経緯がより明確となりました。とりわけ、本尊阿弥陀如来坐像の制作(再興)年代とその造像背景が、胎内墨書の発見によって明らかになったことは、多くの謎を解決させてくれました。

浄土宗壇信徒によって元禄13年(1700)に「再興」された阿弥陀如来像は、現在、世尊寺で禅宗風に「釈迦如来坐像」と呼ばれています。

その理由として、このような古寺復興にかかわる複雑な歴史的背景があったことを、胎内墨書は教えてくれます。

なお、平成26年度には、奈良県指定文化財・木造十一面観音立像の修理にともない、頸部に記された墨書がみついています。この修理も元禄13年に家城左近がおこなったもので、両像は同じ仏師によって同時に造像、修理されていることもわかりました(これについては機会をあらためて報告する予定です)。

本調査・報告をまとめるにあたって、所有者である世尊寺住職・本山一路氏をはじめ、奈良県教育委員会文化財保存課の神田・佐藤両氏には、阿弥陀如来坐像の写真と調査データの提供をうけました。また長谷洋一氏には、早い時期に調査の成果を公表いただいたこと、多くのご指導を得ましたことを記して感謝します。

#### 【註】

- (1) 大淀町教育委員会「1 現光寺縁起絵巻(平成19年度の調査)」『平成19～22年度大淀町文化財調査報告書』大淀町文化財調査報告書第6集2011年。
- (2) 長谷洋一「奈良・世尊寺阿弥陀如来坐像考—近世における比蘇寺と〈放光樟像〉—」『近世の宗教美術—領域の拡大と新たな価値観の模索』仏教美術論集第7巻2015年。

PLATE 07 世尊寺の文化財 調査写真1(雲門頂相)



01 頂相A 外題



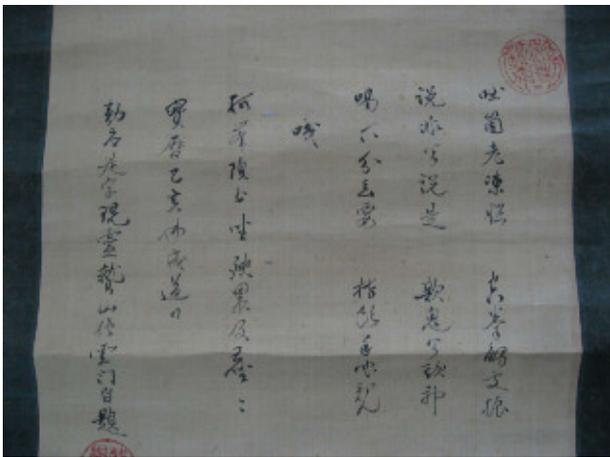
02 頂相B 外題



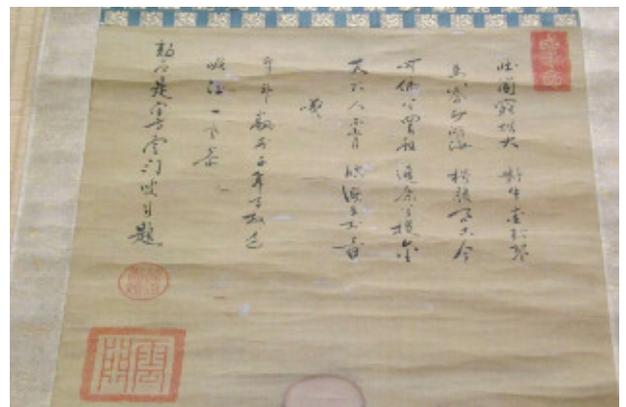
03 頂相A 絵像



04 頂相B 絵像



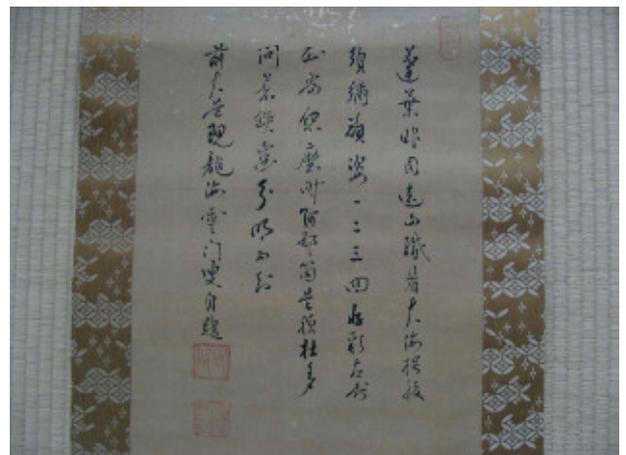
05 頂相A 贊



06 頂相B 贊



07 頂相C 絵像



08 頂相C 贊



01 阿弥陀如来像を壇上よりおろす



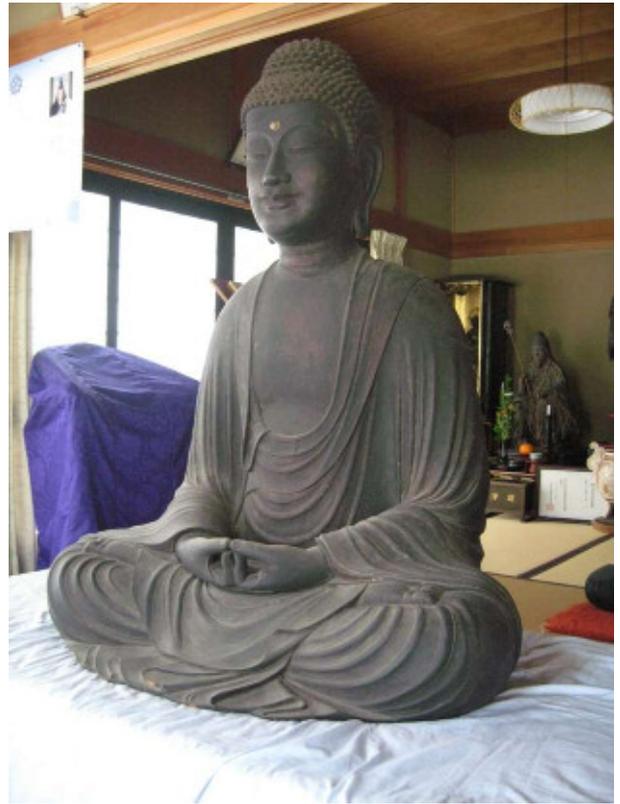
03 同像下面



04 同像胎内の観察



06 同像の表面観察 (関西大学・長谷洋一氏)



02 同像全形



05 同像胎内背面の墨書

## 5 槇ヶ峯古墳（平成25年度の調査）

### i 調査に至る経緯

槇ヶ峯古墳（槇ヶ峯1号墳）は、大淀町新野地区の丘陵（槇ヶ峯）頂部（標高205m）に位置する横穴式石室墳です。丘陵下の国道169号線沿い、新野地区共同墓地の入口にある道標から、墓地をぬけてゆくと古墳にたどり着きます。

石室の入口前には解説板が設置され、自由に見学が可能です。当古墳を含む新野528番地（455㎡）は、平成18年（2006）8月8日に寄付された町有地で、平成19年1月17日には当古墳が町指定史跡となり、今にいたっています。

見学者への便宜を図るため、平成18年からは町文化財調査会の有志がボランティアで草刈り等を実施しています。また、当地に密植されていたスギ林も、平成18年に同調査会有志による伐採がなされ、周囲の視界は良好です。現在はその残株もきれいに取り除かれています。



CUT 09 槇ヶ峯古墳近景（南西から・平成18年撮影）

当古墳は小規模な円墳で、周溝等の有無は確認されていません。墳丘周辺には、葺石とみられる握りこぶし大の川原石が多く散在しています。墳丘の南側と西側は、開墾のため直線状に削平されていますが、北側と東側の墳丘基底面

は、ほぼ円形の旧状を保っています。

墳丘の高さは、現状で約1.8～2.0mを測りますが、石室の天井石が露出するなど、かなりの削平をうけていることがわかります。

結晶片岩でつくられた石室は、天井石が数箇所抜き取られていて、そこから中に入ることができます。玄室（奥の部屋）はある程度土砂で埋没し、羨道（通路部分）はすべて埋まっています。玄室は「石棚」とよばれる施設をそなえ、羨道との間に、玄関状の空間（玄室前道部）を備えている可能性も指摘されています。

これらは、紀の川下流域（和歌山市内）に集中してみられる「岩橋（いわせ）型石室」の特徴とされます。奈良県内で、平群町・三里古墳（県指定史跡）、下市町・岡峯古墳（県指定史跡）とともに、その特異な「石棚」を観察できる数少ない例のひとつが、槇ヶ峯古墳です。

当古墳は5基ある槇ヶ峯古墳群のひとつです。2～4号墳の実態は不明ですが、新野地区共同墓地の入口にたつ六地蔵の裏手には、小規模な円墳とみられる槇ヶ峯5号墳（未調査）の高まりが残されています。

### 【既往の調査】

槇ヶ峯古墳については、大正年間にその存在が知られるようになってから、しばらく調査の機会はありませんでしたが、昭和52（1977）年2月6日から10日間の期間で、奈良県立橿原考古学研究所による測量調査が実施されています。

この測量の結果、当古墳は、墳丘径約11mの円墳と推定されました。墳丘の高さは推定で約2.5m。玄室は幅約1.7m、長さ1.65m以上（推定2.8m）。羨道（石室へいたる通路部分）は一部削平されていますが、推定で3.7m以上とされました<sup>(1)</sup>。

その後、平成22（2010）年1月に大淀町が当古墳の航空測量調査を実施しました<sup>(2)</sup>。これに

より、玄室中心を軸として、正円形で復元した墳丘の直径は11mとなり、ほぼ従来の推定を裏付ける結果となりました。また、残りのよかつた東側墳丘斜面の傾斜角をもとに墳丘カーブを算出すると、本来の墳丘の高さは2.5m以上と推定されます。

南西方向に開口する石室も、この測量の結果、最大全長7.5mの範囲内におさまることがわかりました。玄室は幅1.4m～1.7m、長さ2.2m以上、羨道（玄室前道部を含む）の長さは3.3m以上。玄室の高さは現状で1.3mですが、本来の高さは、埋没している土砂を除けば、約1.6mと推定されます。発掘調査がおこなわれて、その規模が判明した岡峯古墳や越部1・2号墳（本町越部）に比べると、槇ヶ峯古墳は墳丘、石室規模ともに小型の横穴式石室墳ということになります。

これまでの測量調査により、本古墳の墳丘および石室の規模はほぼあきらかとなりました。

今後は、測量成果をふまえて、墳丘と石室部分の試掘調査等を実施し、上記の推定が正しいかどうか、また、年代の決定に必要な土器や副葬品等が石室内等に残っているかどうか、そして、埋葬施設が「岩橋型石室」の特徴をどの程度有しているのかをあきらかにすることが課題となっていました。

#### 【イノシシの攪乱への対応】

平成25年5月25日（土）に、例年どおり当古墳周辺の草刈と石室内の清掃を実施しました。その際、墳丘南側の裾部が激しく攪乱されているのを確認しました。この箇所はすでに、開墾により墳丘が直線状に削平され、墳丘の断面が露出していた場所です。現場の状況から、この攪乱は盗掘などではなく、墳丘に季節的に生育するタケノコを狙ったイノシシによる攪乱と判断しました。

そこでまず、攪乱された裾部の土砂流出を止めるため、次善の処置として、土嚢積みで墳丘露出箇所を保護することになりました。

また、槇ヶ峯古墳を復旧する機会が得られたのを機に、町教育委員会と町文化財調査会は、次のとおり試掘調査の実施計画をたてました。

まず墳丘露出箇所については、攪乱部分をふくむ調査トレンチを墳丘裾部に設定すること。ここでは、露出部分の断面観察等をおこない、墳丘の盛土方法などの構造把握をめざすことになりました。

石室内については、イノシシによる攪乱はありませんでしたが、清掃の際、石室内の東半下部に大きめの石材の露出が確認されていました。

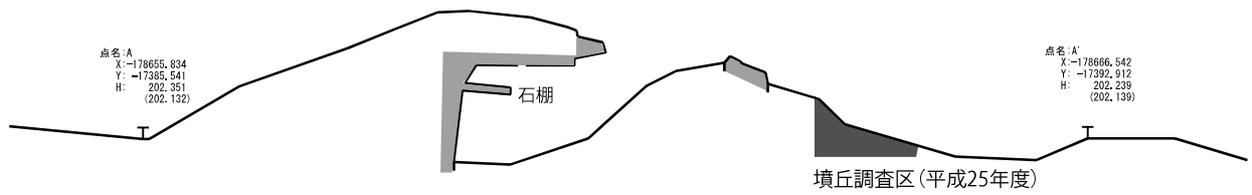
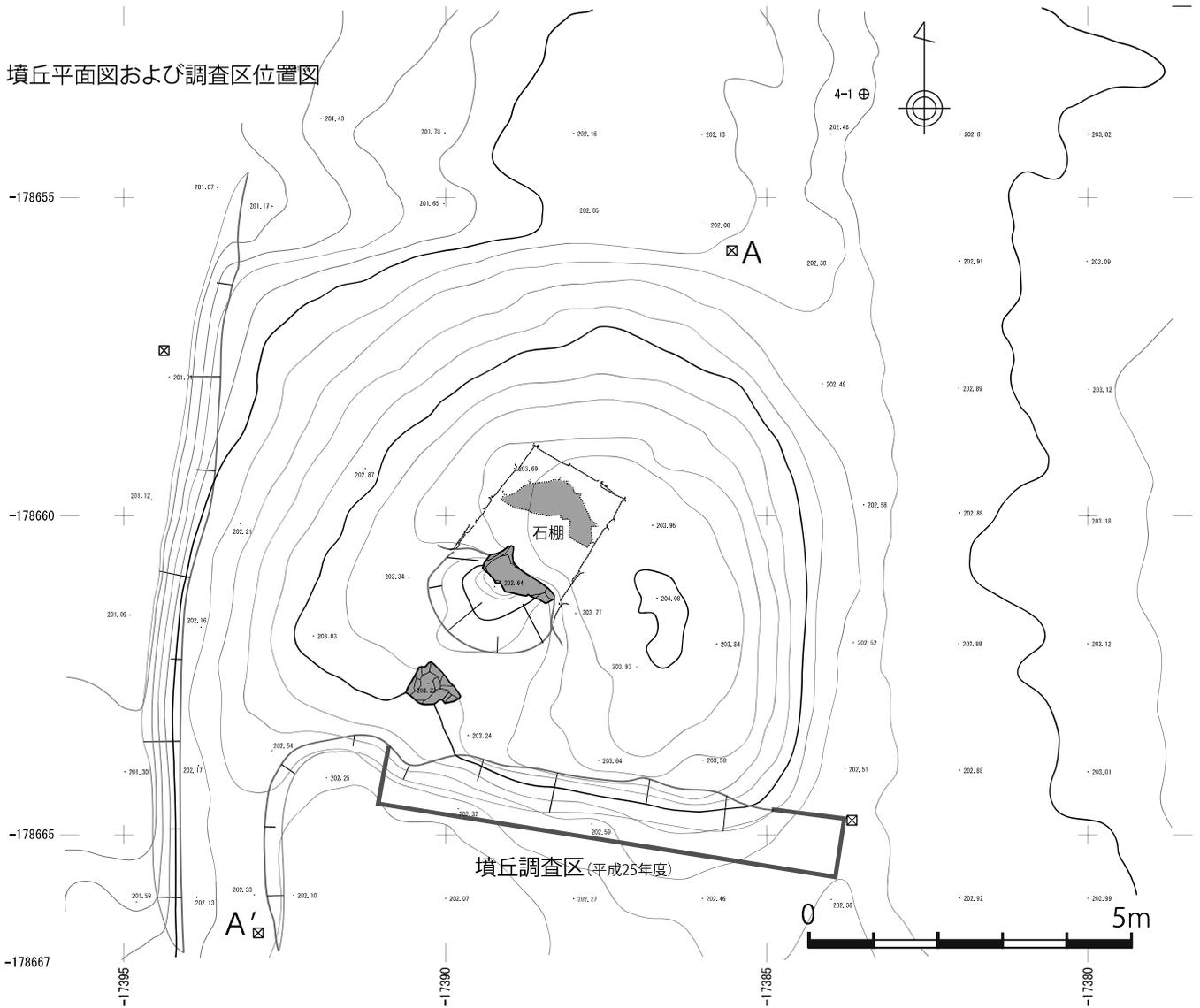
これが石室を構成する石材の一部なのか、それとも埋葬に用いられた石棺等の施設の一部なのか、本来の位置を留めているのかどうかなど、石材の解釈とその保存方法も問題となりました。そこで、当該石材の周辺部を試掘し、その実態解明をめざすことになりました。

## ii 調査の成果

### A 調査の方法

調査にあたり、本古墳の墳丘および石室内に計10㎡の調査区を設定しました。墳丘部分の調査区の面積は南北1m、東西8m（面積8㎡）で、すでに攪乱されている墳丘断面の精査を主な目的としました。

この調査区では、墳丘断面の下に幅0.3mの溝掘りをおこない、古墳の基底面となる地山の高さを確認すること、墳丘盛土作業の最小単位などを観察することを目指しました。結果、墳丘の盛土に明確な単位は認識できませんでしたが、調査期間内で観察を終え、現況のまま記録撮影をおこないました。

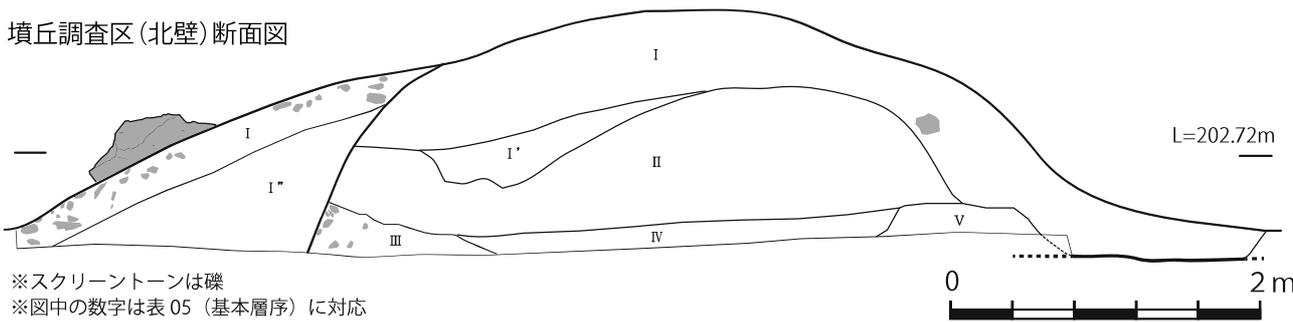


DL = 200.00m

### 南北 A-A' 断面図



### 墳丘調査区(北壁)断面図



※スクリーントーンは礫  
 ※図中の数字は表 05 (基本層序) に対応

図 12 槇ヶ峯古墳の墳丘平面・断面実測図

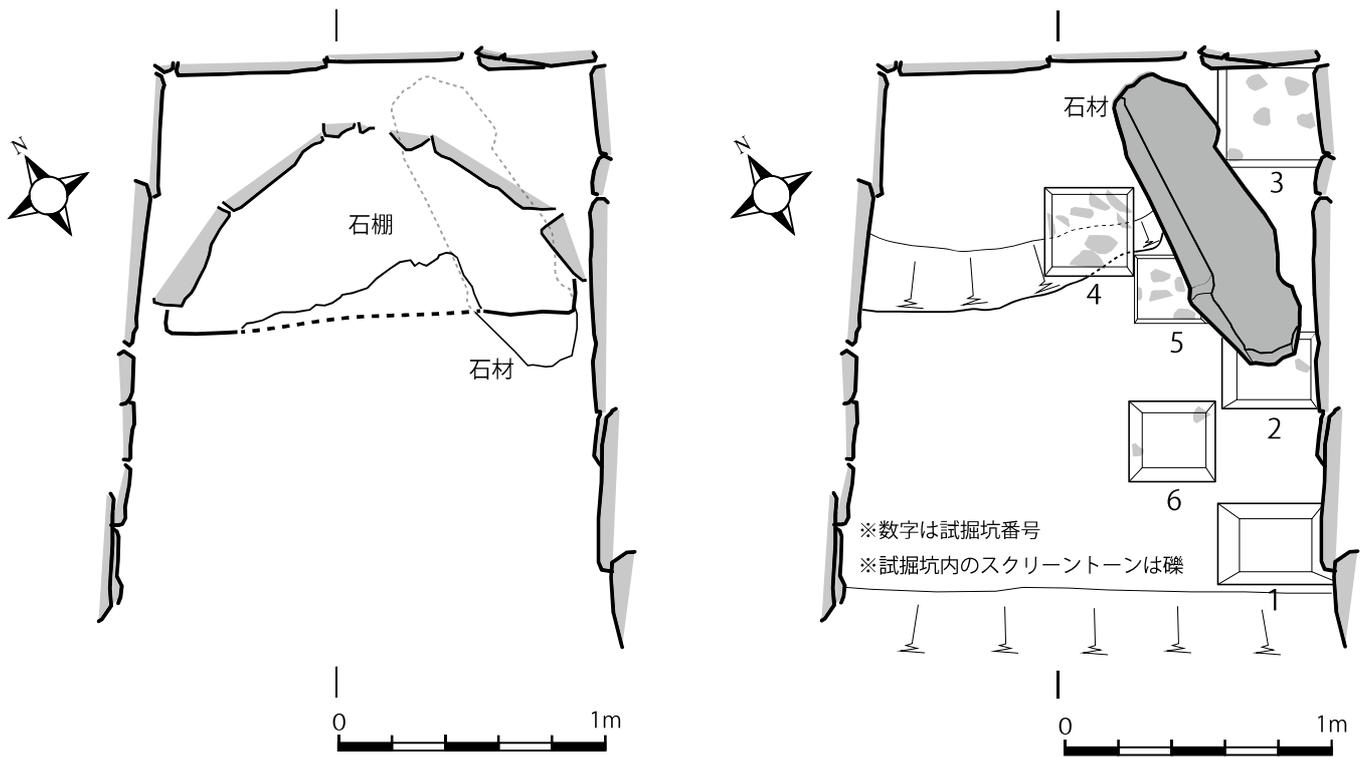


図13 槇ヶ峯古墳の石室（玄室）実測図（左・石棚より見通し 右・床面と試掘坑）

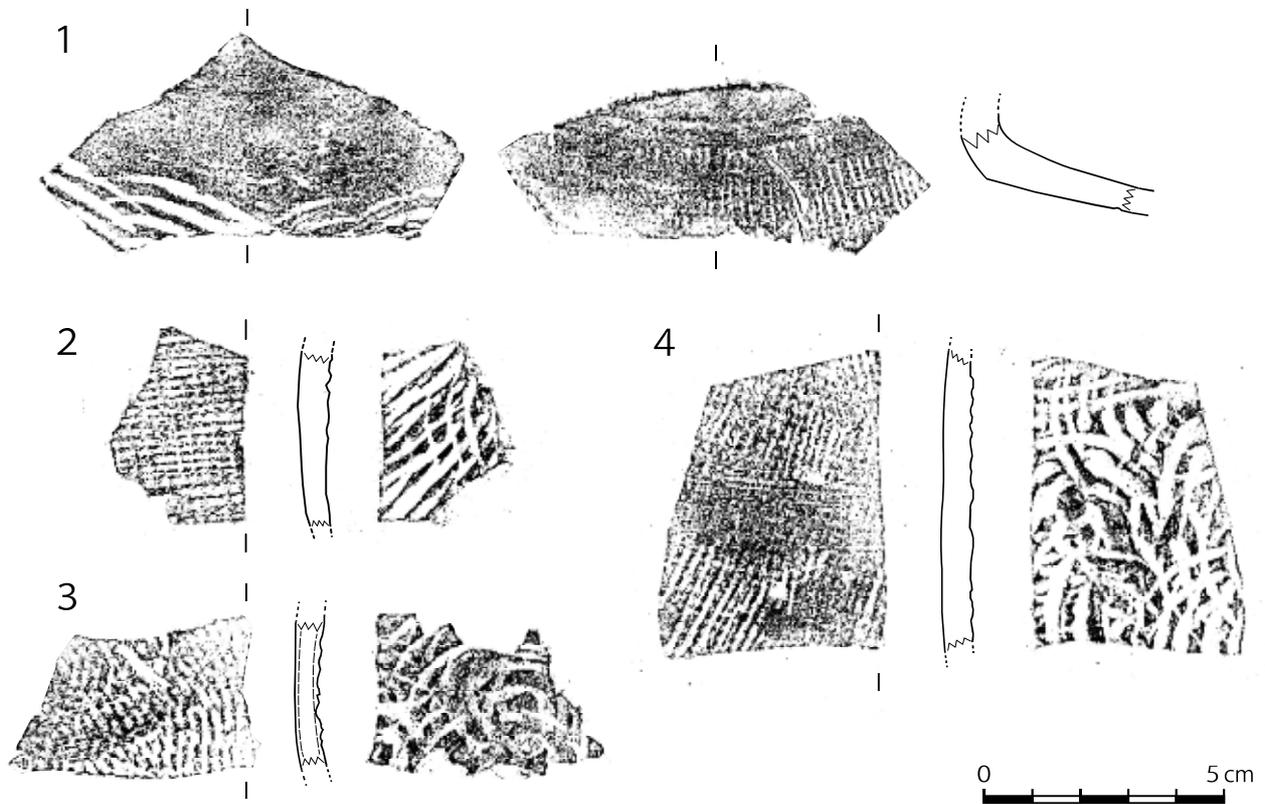


図14 槇ヶ峯古墳の出土遺物（須恵器）実測図

石室内については、懸案の石材の埋没状況と、石室床面の確認を目的としました。ただし、将来的な再調査も考えて、すべてを掘削せず、石材が横倒しになっている玄室の東半部にかぎって、0.4m四方の試掘坑を6ヶ所、ます目状にいて、その土層を観察することにしました。調査期間は、平成25年9月25日（水）から10月3日（木）で、調査期間中の9月27日には、地元対象の現地説明会を実施しました。

なお、今回の調査にあたり、墳丘と石室内の基本層序を次のとおり設定しました。墳丘の盛土層は、上から順にⅠ～Ⅴに分層し、石室内の埋土（大半が石室外からの流入土）との対応も試みました。基本層序は表05のとおりです。

表05 槇ヶ峯古墳の基本層序

<b>Ⅰ層</b> ：灰色礫混じりシルト質土。 礫を多く含む。墳丘の落ち込み土をⅠ'層 付近の落ち込み土をⅠ"層とし区別した。
<b>Ⅱ層</b> ：灰褐色～黄褐色シルト質土。 墳丘の大半を占める。石室内の埋土上層（南半 部および北半部上層）はⅡ層の流入土。 便宜的にⅡ'層として区別した。
<b>Ⅲ層</b> ：褐色礫混じりシルト質土 ブロック状の地山起源の2次堆積土。石室周辺 でのみ確認できた。この下は地山。
<b>Ⅳ層</b> ：暗褐色シルト質土 墳丘最下部でこの下は地山。この層に類似する 暗褐色シルト質土が石室内の埋土下層（北半部 下層）にもみられたが両者の関係は不明。 便宜的にⅣ'層として区別した。
<b>Ⅴ層</b> ：黄灰色シルト質土 Ⅱ層下部の墳丘端部にでのみ確認できた。 この下は地山。

## イ 遺構と遺物

### 【遺構・墳丘】（PLATE09-01～04）

すでに攪乱されていた、墳丘南側の土層を観察するため、調査区断面の凹凸をならして精査しました。その結果、墳丘盛土の具体的な積み方が確認できました。

当古墳は、すべて盛土によって築造されていました。盛土の最下部では、石室入口（羨道部）付近（Ⅲ層）と墳丘端部（Ⅴ層）にまとまった土層がみられ、その間は、暗灰色系の土（Ⅳ層）で埋められていました。これらはそれぞれ、Ⅲ層が石室側壁の裏込土、Ⅴ層が墳丘端部の範囲を示すドーナツ状の高まりである可能性が考えられます。つまり、この土層の堆積から、当古墳の墳丘と石室が、平坦面から順に積み上げるように構築されたことがわかります。

Ⅲ層の上には、灰～黄褐色系の土（Ⅱ層）が盛土されていますが、「はん築」や「土嚢積み」のような細かい単位は確認できませんでした。また、Ⅴ層の外周には地山の露出がみられましたが、あきらかに周溝と判断できる痕跡はみられませんでした。

Ⅱ層の上に堆積する灰色の礫混じり土（Ⅰ層）は、石室の天井石を含む墳丘全体を覆っており、現在の石室の羨道部を埋めている土です。

本来の墳丘盛土の高さは、現状よりさらに高かったと考えられるので、Ⅰ層も当初の盛土の一部で、羨道部を埋めているⅠ'層、Ⅰ"層はそれが石室内へ落ち込んだもの（2次堆積土）と理解しました。

なお、上記の墳丘盛土については、調査で除去した土をすべてふるいにかけてみましたが、明確な遺物の出土はみられませんでした。

### 【遺構・石室】（PLATE09-05・06）

当古墳の石室内には、天井石が取り除かれて

開口した部分から玄室に土砂（Ⅱ層）が流入していました。

床面を確認するために設けた試掘坑(0.4m四方)は、玄室の東壁の羨道部側から、逆時計周りに「試掘坑1～6」の番号をつけました。これらの埋土は石室外へいったん搬出し、坑ごとにわけてふるいをかけ土嚢袋につめ、遺物のとりあげ後に番号をつけ、それぞれの試掘坑の埋め戻しに用いました。石室の床面が確認できたのは試掘坑2～5で、羨道部側の試掘坑1・6は堆積が深かったため、任意の深さ(0.2m)まで掘り下げて記録しました。これらの試掘坑では、予想どおりすべての調査区で流入土の堆積(Ⅱ層)がみられました。

ただし、玄室奥側(石棚の下部・後述する石材の周辺部)の試掘坑2～5では、流入土と床面の間に、厚さ10cmの暗灰色土(Ⅳ'層)がみられました。ここからは、後述する鎌倉時代の土師器等の細片が出土していますので、その頃に石室内で堆積した土と考えられます。

試掘坑2～5からは、上記のⅣ'層を取り除いたところで、5cm前後のこぶし大の礫が多く出土しました。これらは床面の敷石としてもちこまれた可能性が想定されます。

これにより、玄室の高さは、調査前の予想どおり1.6mとなり、床面から石棚下面までの高さ(実際の埋葬空間の高さ)は1.25mとなることがわかりました。

#### 【遺構・石棺】(PLATE09-07・08)

玄室内で検出した大きめの石材は、結晶片岩製でした。全体が平らに整形されており、長さ1.15m、幅0.4～0.45m、厚さ0.1mで、横倒しの状態になっており、玄室の東北隅にむかって20度ほど傾いていました。

調査の結果、床面より0.1m浮いた状態で、元の位置を保っていないことがわかりました。

また、東北隅側の長辺端部には、破面(破砕面)が多くみられました。破面の多い部分を、地面に設置された下端部とみれば、この石材は石棺の側壁の一部と判断できます。

その場合、これ一枚で側壁を構築するには小さいため、同じ大きさの側壁を左右に2枚ずつ連ねて組みあわせた、長さ2.3m前後の組合せ式の石棺が想定されます。

なお、細片となった結晶片岩をのぞけば、石室内にこれ以外の石棺材の遺存はみられませんでした。鎌倉時代以降、ほとんどの石材は石室外に持ち出されたものと想定されます。

#### 【遺物】(PLATE10-09～12)

出土遺物は、須恵器と金属製品以外、玄室内から出土しています。玄室内のⅣ'層から出土したものは、すべて鎌倉時代の土器・瓦器の細片です。

なお、出土遺物は細片がほとんどで、層一括でとりあげましたが、玄室内については、試掘坑ごとに出土遺物をわけてとりあげています。

#### 須恵器

4点出土しています。いずれも墳丘および石室周辺部からの採集です。うち3点(図14-1・2・4)は、調査期間中およびその後の巡視中に、石室羨道部の堆積土上部で表採されたもの。外面にタタキ目、内面に青海波文をもつ壺(もしくは甕)の頸・胴部片です。

もう1点(図14-3)は、墳丘南端周辺で表採されました。壺(もしくは甕)の胴部片です。

#### 金属製品(鉄製品)

フック状の曲部をもつもの。用途は不明ですが、墳丘の攪乱土中より出土しています。

#### 土器・瓦器

細片がほとんどですが、明確に古代以前に遡

る土器片等はなく、時代のわかるものでは鎌倉時代の土師器や瓦器等が含まれていました。

いずれも石室内の埋土Ⅳ「層からの出土で、後世の盗掘、もしくは石室を何らかの目的で利用したようすがうかがえます。

### iii まとめ

今回の調査では、墳丘の断面観察をつうじて、当古墳の構築法を知る手がかりが得られました。

予想される構築工程は、以下のとおりです。

- ①整地。
- ②墳丘範囲をドーナツ状の土堤(Ⅴ層)で明示。
- ③土堤の中央部に石室の位置を定め、側壁を積み上げ、随時裏込め土で固定(その後、Ⅴ層で土堤と裏込め土の間を埋める)。
- ④石室(側壁・奥壁)ができた段階で、周囲に盛土(Ⅱ層)、石室内に石棺を構築(埋葬)。
- ⑤天井石を高架し、墳丘全体を盛土(Ⅰ層)で覆う、といったものです。

④⑤の前後関係など、まだ不明な部分もありますが、当時の小規模な横穴式石室墳の構築法を探るうえで、当古墳の調査成果が寄与できる部分はすくなくありません。

調査後の墳丘断面は、土のう積みで保護していますが、将来的には①見学者が観察できるよう樹脂等で固める、もしくは、②断面をはぎ取り保存する、といった保存・活用方法や、イノシシ対策(墳丘に竹が生えないような工夫)なども検討してゆかねばなりません。

また、遺構にはともないませんが、当古墳の年代をきめる手がかりとして、今回はじめて須恵器片が発見されました。これらの須恵器片は、いずれも、壺もしくは甕といった中・大型品で、石室周辺や羨道部付近に想定される供献品(被葬者にささげるもの)の一部とみられます。

これは、横穴式石室墳でおこなわれた、石室

を閉じる際の儀礼行為をさぐる手がかりにもなります。今後、羨道部を詳しく調査するうえで留意しておくべき点でしょう。

今回の調査で注目される成果のひとつは、石室内に残されていた石棺材です。残念ながら、元の位置を保っていませんでしたが、組合せ式石棺の一部と推定されます。

吉野郡内では横穴式石室の多くで組合せ式石棺が用いられているので、今回もその一例として追加されます。配置方向については、大きさから推定して、玄室内に縦置き(石室の長軸と並行方向)に設置されたとみられます。

この石棺材も、今は現状のまま土のう積みで保護していますが、将来的には、詳細な記録をとったうえで石室の外へ持ち出し、覆屋の下などで公開されることが望まれます。

今回の調査は、平成24年度に本町がおこなった今木・保久良古墳での発掘調査の方針(本書12頁)を尊重し、町教育委員会と地元新野地区の出身者も参画する町文化財調査会との協働事業(ボランティア発掘)として実施しました。

今後の課題は、地域社会に根付く文化財としての槇ヶ峯古墳の位置づけです。行政と町民が協働で文化財の保存・活用を考えるようなアイデアが必要とされています。

当古墳が地域の人々にとって、地域の勇気となり、地域の誇りとなる「地域遺産」となるよう守ってゆきたいと思います(もちろん、イノシシやいきものたちとの共生も考えながら)。

### 【註】

- (1) 奈良県橿原考古学研究所編『平群・三里古墳 付 岡峯古墳・槇ヶ峯古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第33冊 1997年。
- (2) 大淀町教育委員会編「3 槇ヶ峯古墳(平成21年度の調査)」『平成19～22年度大淀町文化財調査報告』大淀町文化財調査報告書第6集 2011年。

PLATE 09 槇ヶ峯古墳 調査写真1(墳丘・石室)



01 調査前(南から)



02 調査前(東から)



03 墳丘断面(南から)



04 墳丘断面詳細(南東から)



05 石室開口部(南西から)



06 石室内(玄室)



07 石材(石棺)の出土状況



08 同出土状況(拡大)

PLATE 10 槇ヶ峯古墳 調査写真2(遺物と出土状況・その他)



09 須恵器(4)の露出状況1



10 須恵器(4)の露出状況2



11 埋土のふるい作業



12 出土遺物(須恵器)



13 現地説明会



14 墳丘保護作業のようす1(東から)



15 同2(東から)



16 同3(南から)

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいせい23～25ねんどおおよどちょうぶんかざいちょうさほうこく
書名	平成23～25年度大淀町文化財調査報告
副書名	保久良古墳・畝火山口神社の水取り神事・大岩大日堂・世尊寺の文化財・槇ヶ峯古墳
巻次	
シリーズ名	奈良県大淀町文化財調査報告書
シリーズ番号	7
編著者名	松田 度
編集機関	奈良県大淀町教育委員会
所在地	〒638 - 8501 奈良県吉野郡大淀町桧垣本2090番地
発行年月日	平成27年(2015)3月31日

ふりがな	ふりがな	コード	世界測地系(度/分/秒)		調査期間	調査面積	調査原因
文化財(遺跡)名	所在地	市町村	北緯	東経	年・月	m <sup>2</sup>	
ほくらこふん	ならけんよしのぐんおおよどちょうおおあざいまき	29442	34/	135/	2011.6～ 2012.6	20	学術調査
保久良古墳	奈良県吉野郡大淀町 大字今木151-1		41/01	75/48			
うねびやまぐちじんじやの みずとりしんじ	ならけんよしのぐんおおよどちょうおおあざつつた	29442	34/	135/	2014.7		学術調査
畝火山口神社 の水取り神事	奈良県吉野郡大淀町 大字土土地内		38/58	80/09			
おおいわだいこちどう	ならけんよしのぐんおおよどちょうおおあざおおいわ	29442	34/	135/	2012.12～ 2013.1		改修工事とも なう立会調査
大岩大日堂	奈良県吉野郡大淀町 大字大岩地内		41/67	76/63			
うんもんちんそう あみだによらいざぞう	ならけんよしのぐんおおよどちょうおおあざひそ	29442	34/	135/	2012.9～ 2013.8		学術調査
雲門頂相 阿弥陀如来坐像	奈良県吉野郡大淀町 大字比曾762		40/49	83/13			
まきがみねこふん	ならけんよしのぐんおおよどちょうおおあざにの	29442	34/	135/	2013.9～ 2013.10	10	遺跡保護とも なう学術調査
槇ヶ峯古墳	奈良県吉野郡大淀町 大字新野528		38/93	81/09			

文化財(遺跡)名	種 別	主な時代	主な構造	主な遺物・所蔵品	特記事項
保久良古墳	大淀町指定史跡	7世紀前半	円墳・列石 横穴式石室	石棺材(結晶片岩)・琥珀 玉・須恵器・土器等	建王(649-658)のモガ リ塚伝承地
畝火山口神社 の水取り神事	大淀町指定無形民俗文化財	18世紀～	住吉神社 水取り場		宝暦9年(1759)以降 神事が継続
大岩大日堂	有形文化財(建造物)	17世紀末	桁行三間・ 梁行二間・ 入母屋造	堂内に棟札・鬼瓦等 木造大日如来坐像(大淀町 指定文化財)	元禄10年(1697)の建立 町内現存では最古の建築
雲門頂相	有形文化財(絵画・書跡)	18世紀	軸装 絹本着色		宝暦5年(1755)ほか 3幅あり
阿弥陀如来坐像	有形文化財(彫刻)	17世紀末	寄木造 古色仕上げ		胎内に元禄13年(1700) の墨書銘を確認
槇ヶ峯古墳	大淀町指定史跡	7世紀前半	円墳 横穴式石室 (岩橋型) 組合式石棺	須恵器・土器等	組合式石棺の一部を新た に確認

## 平成23～25年度大淀町文化財調査報告

保久良古墳・畝火山口神社の水取り神事・大岩大日堂・世尊寺の文化財・樺ヶ峯古墳

奈良県大淀町文化財調査報告書 第7集

編集 奈良県大淀町教育委員会  
(〒638 - 8501 奈良県吉野郡大淀町桧垣本2090番地)

印刷 岡本印刷所  
(〒638 - 3126 奈良県吉野郡大淀町新野342-2番地)

発行 平成27年（2015）年3月31日